



TITLE:

前近代のカーブル：東部アフガニスタンにおける大都市の變遷

AUTHOR(S):

稲葉, 穰

CITATION:

稲葉, 穰. 前近代のカーブル：東部アフガニスタンにおける大都市の變遷. 東方學報 2013, 88: 402-359

ISSUE DATE:

2013-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/180563>

RIGHT:

前近代のカーブル

—— 東部アフガニスタンにおける大都市の變遷 ——

稲 葉 穰

1 はじめに

イギリスの外交使節バーンズ (A. Burnes) は、1837 年カーブル (Kābul) への 2 度目の旅の際に次のようなことを書き記している。

カーブル自體の古代史はよくはわからない。ここの人々自身はノアの 2 人の息子、Cakool と Habool が彼らの祖であるという。彼らによれば、2 人はこの土地の名前について争い、ついにはそれぞれの名前から 1 音節ずつをとって組み合わせることで合意した。それゆえカーブルとなったのである、と。ヒンドゥー達は、イスラーム教徒達に滅ぼされた支配者で、Urj という名で知られる王は Vikramajeet の 4 代後の子孫であると主張する。しかし Vikram をそれほど我々に近い時代に位置づけるような歴史書は知られていない。ある者達によれば Urj は拜火教徒 (Gubr) で、Silur と Toor という 2 人の兄弟がいた。彼は又しばしば Cabool Shah という名前で呼ばれる。(Burnes 1842: 264-265)

バーンズが最初に述べているように、實はカーブルの古代史には不明な點が多い。すでに 19 世紀から東西の研究者達は、當時知られていた文獻や貨幣などに基づいてそれを復元する試みを行ってきた。最近地理學者ド・プラノール (X. de Planhol) が『イラン百科事典 (*Encyclopaedia Iranica*)』に執筆したカーブルの歴史地理に関する項目 (Planhol 2009) は、古代から現代までのカーブルの歴史を辿った極めて貴重な論考であるが、記述の主眼はアフガン王國以降、特に 19 から 20 世紀の都市の變容に置かれている。また残念ながらイスラーム以前の時代に關してはマルクヴァルト (J. Marquart) らの古い研究に基づいているため、後述するように近年格段に進んだ前イスラーム期の歴史理解をもとに書き換えられねばならない。そこで本稿では 18 世紀以前を時代枠として、文獻資料、考古資料、貨幣資料などの情報を比較検討しつつ、前近代のカーブルの歴史を東部アフガニ

スタンの地勢との関連において考えてみたい。

具体的な歴史の検討に入る前段として、舞臺となるカーブルのまちが置かれた地理的状況について簡単に觸れておかねばならない。これこそが本稿の副題にかかげられた東部アフガニスタンにおける大都市の變遷の鍵のひとつとなるからである。

現在のカーブルのまちは、東流してインダス川に注ぐカーブル川の上流に位置しているが、視野を広げるならそれは、ヒンドークシュ (Hindukush) 山脈の南側に広がるカーピシー (Kāpīśī)/カーブル盆地の南端にある。この盆地は北をヒンドークシュ山脈、東を Koh-e Āsheqān および Koh-e Safī の山々、南を Sefīd Koh, Koh-e Qorugh, Surkh Koh の山々、西をパグマーン (Paghmān) 山脈によって限られた地域である。同じく『イラン百科事典』にカーブル地方の自然地理に関する項目を執筆したヴィルデ (A. Wilde) はこの盆地全體を五つの地勢的區畫に區分するが (Wilde 2009)、大まかにはそれらはヒンドークシュ山脈から流れ降るゴールバンド (Ghorband)、パンジシール (Panjshir) 兩川によって潤される北側の平地と、南西および南から流れ出るカーブル川、ロガル (Logar) 川に沿った南側の地域の2つに區分できる。カーブルがこの南側の中心であるのは間違いない。一方北側の中心は、現在はパグマーン山脈東麓のチャーリーカール (Chārīkāār) であるが、かつてはパンジシールとゴールバンドの合流點に近いカーピシーのまちであった (cf. Planhol 2009: 282)。南北の間を隔てるのは、低く小さな山や丘陵であり、兩者の間の交通は容易である。本稿ではカーブルと呼ぶ場合にはこの南側の地域及びその中心都市を、カーピシーと呼ぶ場合には北側とその中心都市 (現在のベグラーム (Begram) 遺跡) を指し、兩方を併せて呼ぶ場合にはカーピシー/カーブル (地域) とする (地圖1参照)。

さて上掲のド・プラノールはカーピシー/カーブル地域において、古代以降政治的中心が北から徐々に南へと移動し、8世紀以降はカーブルが中心となったと述べるが、それがいつ決定的になったのかはわからないとする (Planhol 2009: 283)。しかしこの見解は具體的な資料の検討の上に提示されているわけではない。そこで以下、古代からイスラーム化前夜、イスラーム時代の順に、既知の資料から我々がカーブルについてどのようにその歴史を描き出すことができるかを検討してみよう。



地図 1：カーピシー/カーブル盆地（Google Map 提供地形図をもとに作成）

1. 3 世紀以前

(1) Ortspana, Kaboura, Kabalite

この地域が最初に組織的な形で記録に留められたのは紀元前 4 世紀、アレクサンドロスの遠征とそれに付随して成立したギリシア語文献の上においてであった。アレイア (Areia) からドラングアナ (Drangiana) を経たアレクサンドロスはヒンドークシュ南麓にアレクサンドリアを建設し、そこから山を北に越えてソグディアナ (Sogdiana) を攻めた。それから再び南下してインダス上流域を目指すわけだが、その際 Kophen (Kophes) 川流域を通過している。その後大王の軍がスワート (Swāt) を攻めていることから、地理的にみてこれが現在のカーブル川（あるいは広くカーブル川水系）を指すものであることは広く認められている¹⁾。しかしこのときこの川沿い、特に現在のカーブルの邊りにまちがあったのかどうかは、大王の遠征記自体からは知れない。

1) カニンガム (A. Cunningham) はこの川の名稱自体はヴェーダに見える Kubhā に由来するとする (Cunningham 1979: 31)。

前近代のカーブル

1 世紀のストラボン (Strabon) の地理書は、前 3 世紀のエラトステネス (Eratosthenes) の記録をひいて、Ortospana (Ὀρτοσπανα) というまちに言及し、次のように記す。

カスピアイ・ピュライからパルテュアイア地方経由でアリオイ族の地方にあるアレクサンドレイア市までは路は一本しかない。そこから、一方ではそのまますすぐ進んでバクトリア地方を過ぎ、オルトスパナに通じる山越え道を経由すると、バクトラからくる道と出合う三つ辻へ向かう。この辻がまさにパロパミサダイ族の地方にある。(飯尾譯 1994: ii, 432)

オルトスパナについてはやはり 1 世紀、プリニウス (Plinius) にも次のような記録がある。

しかしながらインドの地理的叙述の観念を得るために、アレクサンドロス大王の足跡を追おう。彼の遠征の測量者であったディオグネトウスとバエトンは、カスピア峽門からパルティアの市ヘカトンピュロスまでの距離は、われわれがすでに述べたマイル数であると書いている。そこからアレクサンドロスが建設したアレイアのアレクサンドリアまで 575 マイル、ドラングアネの市プロプタシアまでは 199 マイル、アラコシアの町までは 565 マイル、ホルトスパナまでは 175 マイル、そこからアレクサンドリア市までは 50 マイル (この記録のある寫しには違った数字がのっている)。この市はカフカス山脈のすぐ下にあると述べられている。それからコペタ河およびインドの町ペウコラティスまでは 237 マイル、そこからインダス河とタクシラの町までは 60 マイル、有名なヒュダスベス河までは 120 マイル、それに劣らず有名なヒュパシス河までは 390 マイル——これがアレクサンドロスの遠征の終点であった。(中野・他譯 1986: i, 259-260)

カンダハール (Qandahār) 周辺を指すと考えられているアラコシア (Arachosia) と、現在のベグラーム遺跡たるカーピシーにあったと覺しきアレクサドリアの間、しかもアレクサンドリア寄りにあるとされる「ホルトスパナ」はリトレ (É. Littré) やマイホフ (C. Mayhoff) のテキスト (Littré 1860: i, 249; Mayhoff 1906: i, 456) では Ortspanum であり、エラトステネス/ストラボンのいうオルトスパナと同じものであるのは間違いないし、位置的にもおそらくそれがカーブル川流域である可能性は高い。これらに従えば、西暦紀元前後、カーブル川流域にオルトスパナと呼ばれるまちがあり、それは「カウカソスのアレクサンドリア」からそう遠くない場所で、交通路の交差する要地であっただろう。

やや遅れてプトレマイオス (Ptolemaios) は 2 世紀、

Kaboura あるいは Ortospana と呼ばれる [まち] (*Καβουρα ἡ καὶ Ὀρτοσπανα*) (VIII-5; 中務譯 1986: 112; cf. Ronca 1971: 69)

と記している。ここからオルトスパナは別名 Kaboura であり、後者こそがカーブルについての最も古い記録であると考えられてきた²⁾。

同じく 1 世紀後半に書かれたと思しき無名著者の『エリュトラ海案内記』第 48 節には

この地方には東の方にオゼーネーと呼ばれる都市があり、そこには曾て王宮があった。そこからこの地方の繁榮や我々との交易を目的とするすべての物が、バリユガサに運び下ろされる。縞瑪瑙、瑪瑙 (?), インド産上質綿布、モロキナ、十分な量の竝質の布 (がそれである)。またそこを通して高地から運び下ろされるのは、プロクライス經由で運び下ろされたナルドス、即ちカッテュブーリネー、パトロパピゲー、カバリテー、それと隣接するスキュティアーを經由してきた (ナルドス)、それにコストスとブデッラである。(薊 1997: 22; cf. Casson 1989: 80)

とあるが、ここに見える地名のうち、オゼーネー (*Ὀζήνη*) は *Ujjain*, バリユガサ (*Βαρύγασα*) はインド西海岸のバルーチ (Bharuch), スキュティアー (*Σκυθία*) はインダス川下流スインド (Sind) 地方に同定されている (薊 1999 参照)。またプロクライス (*Προκλαῖς*) は現在のチャールサダ (Chahārsada=Puṣkalāvati) を中心とするやや広い地方にあてられている (Casson 1989: 204)。カバリテー (*Καβαλίτη*) はカーブル、あるいはカーブル川と結びつけて解釋されており、キャソン (L. Casson) はプロクライスに集められるナルドスが、カーブル周辺、ヒンドウークシュ近邊、およびカシミール (Kashmir) 方面から運ばれたものではないかと見ている (Casson 1989: 207)。一方、前掲のプトレマイオスはパロパミサダイ (Paropamisadai) 北部に Bolitai (*Βολίται*) という部族がいると記録しているが (中務譯 1986: 112), 『エリュトラ海案内記』の記述とあわせ、これは通常 Kabolitai と復元され、カーブル近邊の民を指し示すものだと考えられてきた。

紀元前後のカーピシー/カーブル地域に関する西方の記述はおおよそ以上の通りだが、

2) ただし *Καβουρα* の部分は寫本のヴァリエントとして「Karoura (*Καρουρα*)」があり (cf. Ronca 1971: 69), これは同書 VII-1 に「ケロボトロス王の都」として記されるまちと同じ形である。キュリエル (Raoul Curiel) はそれゆえ、プトレマイオスには、*Καβουρα* が「王の都」である、との記述があるのだ、と述べている (Curiel 1953: 129, なお後段参照)。しかし VII-1 に見える *Καρουρα* は一般にインド南西海岸の地名だとみなされており (cf. McCrindle 2000: 182), *Καβουρα* > *Καρουρα* という連想は成り立たない。要するに、プトレマイオスに登場するカーブルらしき地名は一カ所のみなのである。

現在のカーブルに關して言えば、それらしい場所にあると記録されているのはオルトスパナであり、これがカーブルと結びつけられてきたのはひとえにプトレマイオスの記述によってであるという點は注意してよからう。すでにウィルソン (H. H. Willson) はこのオルトスパナ=Ortospana は Ortostana の誤りであり、サンスクリット語 *Urdhasthāna, すなわち「高い場所」を意味する名詞だとして、これを現在のカーブルのバラ・ヒサル (Bālā Hīṣār) と結びつけ (Wilson 1841: 176), カニンガムもそれを追認している (Cunningham 1979: 28)。要するにオルトスパナはカーブルの別名、あるいは古名だという考えである³⁾。フーシェ (A. Foucher) はストラボンの記述を分析し、そこに描かれるアレリア地方からインドへの道とは、1本がバクトラ (Bactra) を経てヒンドウクシュを越える道、1本が南東アラコシアを経てカーブル川流域へと北上する道、3番目が現在のアフガニスタン中央山塊の中央をまっすぐ東に向かう道で、この3本が再び出会うのがオルトスパナであるなら、それはカーブル川流域にあたるのであり、オルトスパナとカーブルの關係については、非常に近接した二つのまちがあったのではないかとしている (Foucher 1942: 213-215)。

(2) 罽賓と高附

一方、これらの資料と同じ時代に屬するのが『漢書』に見える「罽賓」という地名である。「王は循鮮城に治し」, 「西北は大月氏と, 西南は烏弋山離と接す」(卷96上西域傳罽賓國の條) と記されるこの地名をカニンガムは、レミュザ (J.-P. A. Rémusat) に従って Kophene (<コベン川) に還元し、カーブル川流域の地域全體に與えられた呼稱だと考えた。これに對してターン (W. W. Tarn) はカーブルのまちそのものが當時 Kophen と呼ばれていたのであり、罽賓はその音寫に相違ないと考えている (Tarn 1951: 472)。その後、罽賓の比定についてはレヴィ (S. Lévi) とシャヴァンヌ (É. Chavannes) によってこれをカシミールとみなす見解が發表された。しかしながら白鳥庫吉は1917年「罽賓國考」なる研究において漢籍資料に見える罽賓の指す對象が時代によって變化したことを示し、漢代の罽賓をガンダーラ (Gandhāra) に、その都城循鮮城をプシュカラーヴァティーに同定した (白鳥 1917)。なお彼によれば罽賓の音は Kophene とは關係がない。

その後、音韻的に漢代の罽賓がカシミールを示すことがプーリーブランク (E. G. Pulleyblank) によって明らかにされたが (cf. Pulleyblank 1962), 唐代までの諸資料にあらわれる罽賓が指し示す地域は、資料それぞれの文脈や、それぞれの時代の政治状況の中で、

3) ターンはオルトスパナがカーブルのイラン語名なのではないかとも記している (Tarn 1951: 471 & n.4)。

カシミールからカーピシー/カーブルまでの間で揺れているように見える (Cf 桑山 1990: 43-59; Enomoto 1994: 357-365)。

一方同じく『漢書』に登場し、古くからカーブルにあてられてきたのが「高附」という地名である。同書には

大夏は本大君長無し。城邑は往往にして小長を置く。民は弱く戦を畏れる。故に月氏徙り來りて、皆之に臣畜す。共に漢に使者を稟す。五翮侯有り。一に休密翮侯と曰い、和墨城に治す。都護を去ること二千八百四十一里、陽關を去ること七千八百二里なり。二に雙靡翮侯と曰い、雙靡城に治す。都護を去ること三千七百四十一里、陽關を去ること七千七百八十二里なり。三に貴霜翮侯と曰い、護澡城に治す。都護を去ること五千九百四十里、陽關を去ること七千九百八十二里なり。四に肸頓翮侯と曰い、薄茅城に治す。都護を去ること五千九百六十二里、陽關を去ること八千二百二里なり。五に**高附**翮侯と曰い、**高附城**に治す。都護を去ること六千四十一里、陽關を去ること九千二百八十三里なり。凡そ五翮侯、皆大月氏に屬す。(卷 96 上西域傳大月氏國の條)

とあり、これが大月氏治下の五つの有力者の一つの名前であったことが示される。ところが『後漢書』では

大月氏は藍氏城に居り、西のかた安息と接すること、四十九日行、東のかた長史の居する所を去ること六千五百三十七里、洛陽を去ること萬六千三百七十里なり。戸十萬、口四十萬、勝兵十餘萬人なり。初め、月氏、匈奴の滅ぼす所と爲り、遂に大夏に遷り、其の國を分かちて休密・雙靡・貴霜・肸頓・都密、凡そ五部翮侯と爲す。後百餘歲、貴霜翮侯丘就卻、攻めて四翮侯を滅ぼし、自立して王と爲り、國を貴霜と號す。安息を侵し、**高附**の地を取る。又濮達・罽賓を滅ぼし、悉く其の國を有す。丘就卻、年八十餘にして死し、子の閼膏珍、代わりて王と爲る。復た天竺を滅ぼし、將一人を置きて之を監領せしむ。月氏此の後自り、最も富盛と爲り、諸國之を稱して皆貴霜王と曰ふ。漢は其の故號に本づき、大月氏と言ふと云ふ。(卷 88 西域傳大月氏・高附國の條)

とあり、貴霜翮侯＝クシャーン朝によって領有された地域の名が「高附」とであると書かれる一方で、高附翮侯の名が都密翮侯とかえられている。

カニンガムは高附をカーブル川流域の広い地域の名前であるとみたが (Cunningham 1979: 15)、その地名の語源自體はカーブル (あるいはカーブル川) と関連すると考えた。ただし彼は當時まちの名としてはオルトスパナが通稱であり、それがアレクサンドリアの

建設で中心都市の地位を奪われ、その後のインド・サカ時代に復活したのだろうとしている。ナライン (A. K. Narain) はターンが罽賓をカーブルにあてたのを批判し、罽賓が當時はカシミールをさしたと述べるが、一方で高附についてはこれをカーブルにあてようとしている (Narain 1957: 136)。いずれにしても、『漢書』の「高附」と『後漢書』の「高附」をあわせて解釈しているようである。

これに対して白鳥庫吉は、『魏書』に

閼浮謁國は、故の高附翮侯なり。高附城に都せり。弗敵沙の南に在り、代を去ること一萬三千七百六十里。山谷の間に居る。(卷102)

とあることから、この閼浮謁國を『大唐西域記』に見える「淫薄健國」に比定し、現在のコクチャ (Kokcha) 川上流域、ファイザーバード (Fayzābād) の東、ムンジャン (Munjān) 川とアンジョマン (Anjoman) 川が合流するジュルム (Jurm) 近邊の古名であるヤムガン (Yamghān) にあてようとした (白鳥 1911-12: 119-120)。シモネッタ (A. M. Simonetta) は安息=パルティアだとする限り、高附をカーブルにあてるのは疑わしいのではないかと疑問を呈し (Simonetta 1978: 172)、余太山は『後漢書』の高附の比定については白鳥を踏襲した上で、『漢書』の高附と『後漢書』の高附は異なる場所だろうとしている (余 1990: 22; 2002: 64)。ティエリー (F. Thierry) は『漢書』の「高附」はカーピシー、『後漢書』の「高附」はカーブルをそれぞれ指し示しているのだと考える (Thierry 2005: 469-472)。さらにグルネ (F. Grenet) は『後漢書』に「高附」翮侯が「都密」翮侯に置き換えられているのに注目し、『後漢書』の高附を都密=テルメズ (Termez) 近傍にもとめ、これをアラビア語資料にあらわれる Kuftān に比定している (Grenet 2006: 333-334)。

これらを見る限り、罽賓なり高附なりがカーブルという名称と直接結びつくという明證は見当たらないことになる。

以上、研究史は複雑で錯綜して見えるが、まとめるならおおそ次の通りになるだろう。

1. アレクサンドロスの征服後、アレクサンドロスの征服以後、カーピシー (=ベグラーム) に建てられたアレクサンドリアからそれほど遠くないところにオルトスパナと呼ばれるまちがあり、交通路の交差する要地であった。このまちは紀元前3世紀から後1-2世紀頃までは存在が知られていた⁴⁾。バクトリア、アラコシア、およびアレイ

4) なお、4世紀のローマの歴史家アンミアヌス・マルセリヌス (Ammianus Marcellinus) の歴史書にもパロパミサダエの名の知られたまちとして、Agazaca, Naulibus とならんで

ア (Areia) からの交通路に關するストラボンの記述に従ってこれにあたりそうな場所を求めるなら、やはり現在のカーブル周邊が候補となりそうである。

2. プトレマイオスの Kaboura を手がかりにこれがカーブルのまちと結びつけられるが、他に補強する直接的證據はない。ただ『エリユトラ海案内記』に見えるカバリターという地名（あるいは部族名）はカーブル川上流にカーブルという名稱となんらかの關係を持つとおぼしき集團がいたことをうかがわせる。
3. 以上を勘案し、カーブルという名稱自體の有無を措くなら、紀元前後の時代、カーブル川上流、カーブル盆地近邊にある程度の規模のまちが、アレクサンドリアとは別に存在したという點は認めてよいだろう。一方、名稱の類似を通じて議論が行われてきた漢籍資料の「罽賓」や「高附」については、ヒンドークシュ山脈南側に關する地名である可能性はあるが、カーブル自體と直接的に結びつくという證據は得られていない。

2. 3 世紀以降

(1) パフラヴィー語テキスト

その後、クシャーン朝時代には都がカーピシーに置かれたこともあって、カーブルについての言及（あるいはそうらしいと考えられるもの）は見当たらなくなる。カニンガムの記述も、プトレマイオス以降はすぐに玄奘の時代まで飛ぶのだが、彼以降の研究の進展に據って明らかになったことがらをもとにキュリエルは、フランス・アフガニスタン考古學調査團 (Délégation Archéologique Française en Afghanistan) の報告書 *Trésors monétaires d'Afghanistan* の中でカニンガムの議論に考古學的知見を加え、7 世紀以前のカーブルの歴史を次のように再構成した (Curiel 1953: 128-130)。

- ① 前 4 世紀初頭、アレクサンドロスの征服の前に Chaman-i Haqūri の hoard が埋藏されたことから、この地に交易に關わるまちがあったと考えられる。
- ② 前 3 世紀半ば、エラステネスは Ortospana というまちに言及するが、これは後のプトレマイオスの記述（上段参照）を勘案すれば、カーブルのことだと考えられる。
- ③ 1 世紀のプリニウス、2 世紀のプトレマイオスが Kaboura という王のまちがあることに言及している。

Ortospana が言及されている (Ammianus Marcellinus 1972: ii, 389)。ただし、これが一次情報であるのか、二次的情報なのかの判断は難しい。

- ④ カーブル周辺の遺跡, Shevaki, Kamari, Yakh-Dara, Senjed-Dara, Seh Topan, Gul Dara 等のストゥーパ, 僧院をフーシェは2世紀建立のものと考えている。
- ⑤ カーブル近郊の Saka 城塞はパルティア時代の建造と考えられている。
- ⑥ 4世紀半ば, カーブルの名前はペルセポリス (Persepolis) のシャープール (Shāpūr) 碑文に現れる。
- ⑦ カーブルおよび Kābulistān は多くのパフラヴィー語テキストに言及される。
- ⑧ 同じ頃, アミアヌス・マルセリヌスはパロパニサダエのまちとして Ort(h)ospana に言及する。
- ⑨ テベ・マランジャーン (Tepe Maranjān) の遺物は4世紀末に, ハイル・ハーナ (Khayr Khāna) のそれは5世紀に属するから, その頃これらの遺跡が建立されたと考えられる。
- ⑩ 6世紀半ばに書かれた *mōbed* (ゾロアスター教の司祭) タンサル (Tansar) のタバリストターン (Tabaristān) 王への手紙には, カーブルがササン朝の領域の境界にあるまちとして言及される。

これらのうち, すでに言及した②と③, ⑧および後で觸れる考古的資料をのぞくと, キュリエルがあげる3世紀から7世紀のカーブルの存在に関する資料は⑥, ⑦, ⑩である。

まず, いわゆるパフラヴィー語テキストであるが, これらを網羅的に調べ上げる事は筆者の能力を超えているので, ここではニーベリ (H.S. Nyberg) の *A Manual of Pahlavi* に採録されているテキストをとりあげて考えてみる。その中では *Kārnāmak i Artaxšir i Pāpakān*, *Legend of Keresāspa*, および *Šāhrestānīhā ī Ērānšahr* には “k’pwl/k’wly” という語が見える (Nyberg 1964: 8, 17, 31, 115)。ニーベリはこれを注してカーブルであるとしている (Nyberg 1974: 116)。それぞれのテキストの成立年代や寫本の状況の詳細について厳密に議論することもまた筆者の能力を超えているが, これらのテキストのうち, ニーベリが利用している前二者の寫本の多くは極めて新しい時代の成立であることは留意しておくべきだろう。3番目の *Šāhrestānīhā ī Ērānšahr* については最近ダルヤーイー (T. Daryaee) による新たな翻譯と研究が出版された。それによれば現存するテキストの原型は8世紀アッパース朝時代に確定したらしいが, 現存している寫本そのものはやはり14世紀のものである。ただし, 同書の原情報あるいはテキスト自體の原型は, 6世紀カワード (Kavād) 1世時代, あるいはホスロー (Khosrō) 1世時代に成立したのではないかと言う (Daryaee 2002: 7)。そこには次の一文がある。

南方では、カーブルのまちを Spandyād の息子 Ardaxšīr が建設した (pad kust [i] nēmrōz šahrestān ī kābul ardaxšīr ī spandyādān kard ēstēd)。 (Daryae 2002: 15, 19)

後述のように、7 世紀以降（厳密には現存する資料が書かれた 9 世紀以降）、カーブルは頻繁にアラビア語、ペルシア語資料に登場するようになるが、このテキストの Kābul がそれに影響されたものなのか、あるいはそれ以前から Kābul という名前を載せていたのか、今明らかにするすべは残念ながら無い。すなわち、これに比較考量すべき対稱例を我々は持たないのである。

タバリスターン王にあてたモウベド・タンサルによる手紙はすでに 19 世紀末、ダルメステール (J. Darmesteter) によって研究され (Darmesteter 1894)、さらにボイス (M. Boyce) によるモノグラフが出版されている (Boyce 1968)。ボイスの英譯に従えばそこには次のような記述がある。

アラーン (Alān) と西方の地域、ホラズム (Xwārezm)、カーブルの邊境の統治者をのぞき、我が家系に属することのないいかなる者も王と呼ばれてはならない。 (Boyce 1968: 35)

さて、あなたが Shāhanshāh の戦いと宴、和平と戦争について尋ねられたことについては、私は以下のように述べましょう。この世界は 4 つの部分に分かれます。第 1 はテュルクの地であり、インドの西の端からローマの東の端までです。第 2 はローマとコプトとベルベルの間の地、第 3 はベルベルからインドまでの黒人達の地であり、第 4 がこの、ペルシアと呼ばれ、「服属する諸邦」と異名を持つ地域で、バルフ (Balkh) 川からアゼルバイジャン (Āḍarbaigān)、Persarmenia の地域の最果てまで、さらにユーフラテスとアラブの地からオマーン (Ōmān)、マクラーン (Makrān) に至り、そこからカーブルとトハリスターン (Toxaristān) までです。この第 4 の區域が大地の中で最もすばらしいもので、他の地域に對して頭であり臍であり、背であり腹であるような地です。 (Boyce, 1968: 63)

書かれている文脈からすれば、ここでのカーブルは我々が知っているカーブルに他ならないだろう。しかしこの手紙のオリジナルはすでに失われ、現在残っているのは 7 世紀にイブン・アルムカッファ (Ibn al-Muqaffa') がパフラヴィー語からアラビア語に翻譯し、さらに 13 世紀にイブン・イスファンディヤール (Ibn Isfandiyār) がペルシア語に重譯したもののみである。手紙の書き手であるタンサル (あるいは Tōsar) はササン朝初代皇帝アルダシール (Ardashir) に仕えた人物だというのが、ダルメステールやクリステンセン (A. E. Christensen) らは記述の内容から見てこの手紙が、6 世紀、ホスロー 1 世の

時代に書かれたものではないかと考えた。ボイスはこれを認めつつも、手紙の内容の中心核はやはりアルダシール時代にさかのぼるのではないかとしている (Boyce 1968: 19)。ただ、同時にこれがアラビア語に翻譯された際、またペルシア語に重譯された際に加筆や改變があった可能性も認めている。一般にこのような経緯で傳世した文獻中に見える地名等について、その取り扱いに注意を要する事はいうまでもない。翻譯者が翻譯當時、通りのよいように名稱をいじっている可能性があるからである。それゆえ、ここに見えるカーブルという言葉がそのまま3世紀あるいは6世紀に関するオリジナルな情報であると見ることは躊躇せざるをえない。

(2) ペルセポリスのシャープール碑文

これらとは異なり、オリジナルな情報として重要なのはキュリエルの言及するペルセポリスのシャープール碑文である。1811年にウーズリー (W. Ouesley) によって發見され、ササン朝シャープール2世の時代 (在位 309-379) に刻まれたと考えられる2種の碑文のうち、第2碑文に2カ所、第2行目と第11行目に“k'wly”という語が現れる。フライ (R. N. Frye) による英譯を以下に示す。

(It is) in the month of Tir of the year 18 on the day of Ohrmazd, that I Seleucus, the judge of Javedshapur and Kabul have come to Persepolis. And from here may I arrive in safety to the court of His Majesty, and may I see His Majesty Shapur the King of Kings in piety and health. And may I return in piety (and) health to Kabul. (Frye 1966: 87)

しかしながら、この碑文にあらわれる“Kabul (k'wly)”については、フライ自身がその後これを「ファールスにある Kavār」⁵⁾と読み直している (Frye 1969: 144, n. 1)。ただしその後ジニユー (P. Gignoux) はフライの修正案に言及した上で、長母音の位置の問題から Kavār は不可能だと注記し (Gignoux 1972: 25, n. 18)、ニーベリも *Glossary* (Nyberg 1974) ではそのままカーブルのことだとした。ただ、ファールスの Kavār であるかどうかは別にして、この語がカーブルを指すという理解には問題ないのだろうか。碑文の内容そのものにはこの地名を検證するための情報は少ないが、手がかりがあるとすれば直前の Jawedshapur (y'wydšhpwhry) という語と、dādvār という官職名であろう。前者は従来地

5) *Hudūd al-'Ālam* にファールスの Kavār として見える地名 (Minorsky 1982: 74)。12世紀の *Fārs-nāma* にもアルダシール・フッラ (Ardashir Khurra) 地方のまちの名として Kawār が言及される (Ibn al-Balkhī: 134)。

名と考えられてきているが、管見のおよぶ限り他の資料からは確證されていない。ギズラン (R. Gyselen) によるササン朝の行政地理に関する優れた研究は、著者が認めている通りほぼカワード 1 世、ホスロー 1 世時代以降が対象となっているが、後半部分に Shāhbuhr/Shāpūr という要素を持つ地名で最も東方に見えるのは Nēv-Šāhbuhr, すなわちニーシャープール (Nishāpūr) である (Gyselen 1989: 17)⁶⁾。一方 *dādvār* は裁判官を意味するが、4 世紀、カーブルにササン朝に任じられた裁判官がいたのかどうかは全く不明である。これもギズランの研究で見える限り、ササン朝のシールにあらわれる回数は少ない (*dādvār* 単獨で現れるのは, Mād kust ī Vastān のみ) (Gyselen 1989: 34)。次節で述べるような貨幣資料はササン朝がこの地域にある程度の支配を布いていた可能性を示しているが、少なくともシャープール碑文の内容のみに基づいて、そこに見える k'wly をカーブルにあてるとは現状では困難であろう。

(3) 考古學的資料

以上のごとく、7 世紀以前に限ればカーブルが実際に同じ名（あるいは類似した名前）でもって現在のまちとほぼ同じ邊りにあったことを、文獻的に確證する材料は現在のところ乏しい。しかしながら文獻資料以外の情報を援用するなら、7 世紀以前のカーブルについてももう少し推定を行うことは可能である。すなわち現在のカーブル近邊の遺跡と遺物の年代からの推定である。

前述の如くキュリエルは、

- ④ Shevaki, Kamari, Yakh-Dara, Senjed-Dara, Seh Topan, Gul Dara 等カーブル周辺に残るストゥーパ、僧院は 2 世紀建立のもの。
- ⑤ カーブル近郊のサカ城塞はパルティア時代の建立。
- ⑨ テペ・マランジャーンの遺物は 4 世紀末に、ハイル・ハーナのそれは 5 世紀に属するから、その頃これらの遺跡が建立された。

等の證據に基づいて、7 世紀以前のカーブルの存在を説明しようとした。確かにこれらの遺跡や遺物は現在のカーブルからの距離や位置關係（地圖 2 参照）から見ても、カーブルというまちの存在が前提となって建造されたと考えてよからう。ある程度の規模以上の宗教施設はそれを物質的に支える都市の存在と切り離して考えることができないからで

6) ただしルリエ (P. Lurje) は、ブハラ (Bukhārā) の “Kāmšāpūr” という運河の名前がシャープール 1 世のトランスオクシアナ征服に由来するものである可能性を指摘しており (Lurje 2003), もしそうであれば知られている最も東方にある shāpūr/shābuhr という要素を持つ地名と言うことになる。

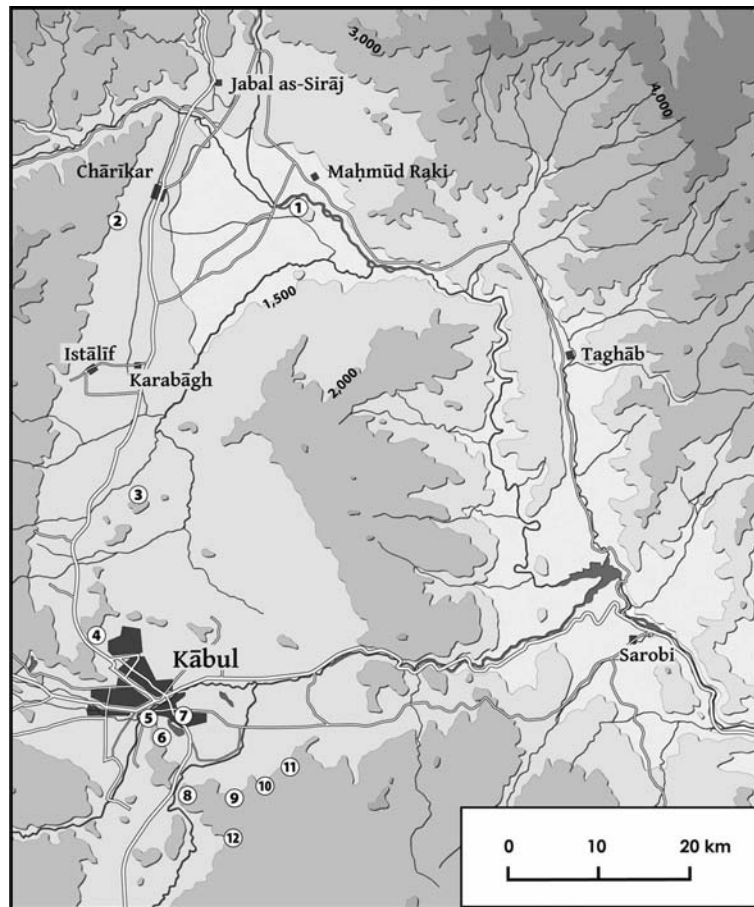
ある。しかし問題はその建造年代である。

フスマン (G. Fussman) は最近の研究においてカーブル周辺の佛教遺跡の年代をおおよそ次のように提示した (Fussman 2008)。まず Shevaki については、いわゆる Shevaki I が5世紀から7世紀、Shevaki III はそれに先立つ300年から500年の間の創建、Kamari もやはり300-500年の間、Seh Topan IV は300年から600年の間、Gul Dara は350年から400年の間、あるいは400年から600年の間、テベ・マランジャーニ I が400年から700年の間の創建で、しかもそれらに対しては400年から650年の間になんらかの増廣が加えられている。すなわちこれらの遺跡年代は、現時点での情報に基づくならおおよそ4世紀から6世紀という年代に起源を持ち、しかも規模が大きくなるのは5世紀以降のことであるといえる。また桑山正進はヒンドウクシュ南側の圓形稜堡建築の検討を通じて、テベ・マランジャーニの造営を5世紀初頭をさかのぼらない時期だとする (桑山 1990: 194-197)。フシェが下した年代よりもかなり新しい時期へと引き下げたわけである。さらに桑山はハイル・ハーナに関しては上層神祠を7世紀以降、下層神祠をそれ以前の時代に割り付け、サカ城塞の建築はこの下層神祠に平行する時期だとしている (桑山 1990: 190-192, 221-222)⁷⁾。

以上のように、フスマンと桑山に従うなら、総じて現在まで知られているカーブル近郊の遺跡群は、少なくともその最盛期についてはほぼ5世紀以降のものということになる。さらに最近発表された、カーブル市街地にほど近いテベ・ナーレンジ (Tepe Narenj) 佛教寺院遺蹟の発掘報告において、発掘者であるパイマン (Z. Paiman) は、同寺院建造が大きく二期にわたって行われたと論じ、第一期が3世紀から5世紀、第二期が9世紀後半だとした (Paiman 2013)。パイマンは第一期以前の構築物の一部をも発見したが、大部分は現在墓地に覆われ発掘が不可能な状態であるという。いずれにせよ、同寺院の第一期は上述の時代枠と大きく齟齬するものではない⁸⁾。

7) サカ城塞については、土器を再検討したガルダン (J.-C. Gardin) らにより、ヘレニズム時代の土器、5-8世紀の土器の存在も明らかにされている (cf. Ball 1982: i, 231)。いずれにせよ城塞自体が長期にわたって継続的に使用されていた可能性はあるが、カーピシー/カーブル地域の南邊防衛という観点からすれば、この遺跡の存在はカーブル自体の存立とそれほど直接には結びつかないとも考えられる。

8) 2006年に山内和也らによっても調査されたカーブルの Ziyārat-e Khoja Safā' から見つかった佛教関連遺物も5-6世紀のものと推測されている (NRICP 2006)。この Ziyārat の近邊では以前から佛像が発見されていた。キュリエルによればそれは觸地印を結んだ佛陀の浮き彫りで、カーブル博物館に所蔵されていたという (Curiel 1953: 129)。またフスマンは Khoja Safā' については、300年から500年の間の創建という年代を想定している (Fussman 2008: i, 81-82)。



(桑山 1990: 282 附圖および Fussman 2008: ii, 191, pl. 3 をもとに作成)

① Begram ② Top Dara ③ Tapa Skandar ④ Khayr Khāna ⑤ Tepe Khazāna
⑥ Tepe Nārenj ⑦ Tepe Maranjan ⑧ Saka ⑨ Shevaki ⑩ Kamari ⑪ Seh Topan
⑫ Gul Dara

地図 2: カーブル近邊の遺跡分布圖

(4) 貨幣學の成果

一方、ヒンドークシュ南側の地域は前イスラーム期の貨幣資料が豊富に発見されることで知られているが、この地域の貨幣について網羅的な研究を行ったゲブル (R. Göbl) は、西暦 4 世紀以降ヒンドークシュ山脈の南北において勢力をもったキダラ (*kidara*)、エフタル (*ēbo (dalo)*)、アルハン (*alxan*) といった銘を持つ貨幣の発行者達を總稱して「イラン系フン (iranischen Hunnen)」と呼んだ。彼によれば、ヒンドークシュ山脈南側においては 4 世紀末にキダラの貨幣が、ついで 5 世紀にはアルハンという銘を持つ貨幣が登場する (Göbl 1967: ii, 44ff)。ゲブルやその後の貨幣學者達はそれが、4 世紀から 5 世紀にかけてキダラとアルハンという二つの勢力が相次いでこの地域に侵入あるいは登場

し、カーピシー/カーブル地域を支配下においたことのあらわれだと考えている。両者は接收したササン朝の造幣所（ゲブルらはそれがカーブルにあったと考えた）を使用し、シャープール2世貨幣の金型を用いて自分たちの貨幣を発行したというのである（Aram 1996: 521）。もしそうであるとするなら、4世紀後半まで、すなわちおおそシャープール2世の治世の間は、この地域はササン朝の掌握する地域だったことになる。しかしながら既知の貨幣の中には明確にカーブルを示す銘文を持つものが知られていないため、それらの貨幣のあり方がカーブルのまちの存立そのものとどう関連するかはわからない。一方テペ・マランジャーニ I の壁の中から出土した退蔵貨幣には368枚のササン銀貨が含まれたが、そのうちにはシャープール2世貨が326枚、アルダシール2世貨が28枚、シャープール3世貨が14枚含まれていた。キュリエルはシャープール3世貨が相対的に少ないことから、その埋蔵時期をシャープール3世の治世の早い時期、385年頃と考えた（Curiel 1953: 119）が、アルラムはシャープール3世の在位より後の時代（390年頃）にこれを置いている（Aram 1996: 521）⁹⁾。いずれにせよそれらは考古學的證據に基づく上述のフスマン、桑山の編年と大きくは齟齬しない。

ところでゲブルの研究から半世紀ほどの間、彼の學統を受け継ぐ貨幣學者達はこの「イラン系フン」の貨幣の事例を大幅に増加させ、さらに詳細な研究を加えていった。アルラム（M. Alam）、ヴォンドロヴェッツ（K. Vondrovec）、フィステラー（M. Pfisterer）らによれば、貨幣の證據から復元できるヒンドウークシュ山脈南側の4世紀以降おおそ以下のようなものであった。クシャーン朝の崩壊後、4世紀のある程度の期間「カーブル」地方はササン朝の支配下にあった¹⁰⁾。一方その東に隣接するガンダーラを押さえていたのは、4世紀後半にクシャノ・ササン朝の王からバクトリアを奪ったキダラ勢力だったと考えられる。しかしキダラの興隆とほぼ同時に、ヒンドウークシュ南側で勢力を伸ばしたのがアルハン貨幣を発行した王達で、彼らがササン朝から「カーブル」地方を奪ったのはおそらく385年頃のことであった。アルハン勢力はその後徐々に支配領域を東へと拡大させ、やがて肥沃なガンダーラをキダラの手から奪った。これは4世紀末から5世

9) ゲブルはテペ・マランジャーニから發見された金貨に *kidaro* という銘を読み、貨幣が埋蔵される前にこの地域はキダラの支配下、あるいは影響下に入っていたと考えた。この見解はクリップ（J. Cribb）（1990）やアルラムによって繼承されている。しかしグルネはこの銘文に對して別の“Kay Wahrām”という読みを與え、これが最後のクシャノ・ササン王の名前であるという見解をとっている（Grenet 1996: 388, n. 57; 2002: 206）。この點に關する最も新しい研究については Cribb 2010 を見よ。

10) 本文中にも觸れたように、從來貨幣學者達は、ササン朝の mint（造幣所）がカーブルにあったと考えてきたが、實際には貨幣に mint 名としてカーブルが現れる例は知られていない。アルラムらは最近これを意識し、“Kābul” mint という言い方を用いている。

紀にかけての出来事だったと考えられている。近年発表されたいわゆるターラカーン (Tālaqān) 奉獻銅板碑文によれば、おそらくは5世紀末、アルハンにはメハマ (Mehama)、ジャヴカ (Javukha)、トラマナ (Toramana)、ヒンギラ (Khingila) の4人の王がおり、ガンダーラ地方の一部をそれぞれ統治していたと推測されるが⁸、現在知られているこれら4名のアルハン王の貨幣はこのことを證據づけていると言う (Melzer 2006; Errington 2010)¹¹⁾。メルツァー (G. Melzer) によって492-93年と推定されたこの碑文の年代よりやや先だって、現在のガズニを中心とするザーブリスターン地方でネーザクシャー (Nezak Shāh/nyčky MLKA) という銘を持つ貨幣を発行した勢力がおそらくはササン朝から同地の支配権を奪うか、あるいはササン朝の宗主権のもと同地を支配するようになった。このネーザクシャー政権は6世紀の第1四半期には、東方へと重心を移したアルハン勢力にかわってカーブル/カーピシー地域を支配下に納めたという (Afram 1996: 529)。560年頃、トハリスターンのエフタルがササン朝と西突厥の連合軍に敗れ、エフタル勢力が衰退し始めたのと期を一にするかのように、ガンダーラのアルハン勢力はヤショードルマン (Yaśodharman) 率いるインド諸王の連合軍に敗れ、北西インドでの地盤を失っていく。やはり同じ頃、ザーブリスターンのネーザクシャーもササン朝によって同地を一時的に追われた、とゲブルは述べる。ガンダーラで劣勢になったアルハンの一部が再び西へ向かい、ハイバル峠を越えてカーブル/カーピシー地域へ戻ったというのがゲブルの假説だが、アルハンとネーザクの貨幣、特に前者の貨幣が後者の貨幣の上に重ね打刻 (overstrike) された事例の検討をもとに、アルラム、ヴォンドロヴェッツもこの説に従っている (Afram & Pfisterer 2010; Vondrovec 2010)¹²⁾。

以上のような貨幣研究に基づいた歴史記述は、残念ながら文献や考古資料と未だ十分にすりあわされたものではない¹³⁾。もちろん貨幣以外の資料がほとんど知られていない

11) この奉獻銅板碑文については、メルツァーの想定するようにそれがアフガニスタン北部のターラカーンではなく、北西インド、ソルト・レンジ (Salt Range) 山脈中にある Talagan に由来するとするド・ラ・ヴァスィエール (É. de la Vaissière) の説がある (La Vaissière 2007 [2012])。また4人の王のうち、メハマのみはヒンドークシュの北側を治める王であった可能性については、稲葉 2011: 69, n. 1; 宮本 2012: 427 を参照。

12) なおウィーン美術史美術館 (Kunsthistorisches Museum) において、2012年12月より2013年9月までイスラーム時代以前のヒンドークシュ南北にかかわる貨幣とその発行者達に関する特別企画展 *Das Antlitz des Fremden* が開催された。筆者はアルラム氏のご厚意により同展示の解説文を入手し、これをも参照できたことを付記しておく。

13) 貨幣資料に基づく歴史像と、文献・考古資料に基づくその間の齟齬は、未だ克服されざる問題として残っている。ヒンドークシュ南麓に関するゲブル、アルラム、ヴォンドロヴェッツらの見解と、桑山の見解の違いについては、Kawayama 2000; Afram & Pfisterer 2010: 26 を参照。ヒンドークシュの北側についても、特にキダラの勃興年代に關して貨幣

という環境下、支配系統のシークエンスが上記のように復元された意義がきわめて大きいのは言うまでもない。しかし、前述のテペ・ナーレンジ佛教寺院遺跡発掘報告に付された出土貨幣研究編においてアルラムは、この點に關して非常に興味深い示唆を行った。玄奘は『大唐西域記』において、彼の往訪時漕矩吒國（Zabulistan）の穠那呬羅山にいた穠那天神は、もとはカーピシーの阿路孫山にいた神であったのだという話を傳えている。桑山正進はこれを、新來の教團が穠那天神教團を追い出し阿路孫山を占有した出來事の記憶と考え、その舞臺をかつてアッカ（J. Hackin）らが發掘した、上下に二つの異なる神祠が重なっていることで知られるカーブルの北のハイル・ハーナ神殿址に比定した。桑山はこの出來事のあり得る年代として、西暦 606 年から 629 年の間の時期を想定している。ハイル・ハーナ上層神殿からはスーリヤ神像が出土し、また玄奘の記録する山の名「阿路孫」は Aruṇa すなわちスーリヤ神の馬車の御者であつて、それゆゑ新來の教團は太陽神を信仰する者達であつた（桑山 1990: 299ff）。アルラムは桑山が想定するこの出來事は、實はアルハン勢力のカーピシー/カーブル地域への再到來という事件と關連するのではないかと指摘したのである（Paiman & Alram 2013: 90-91）。確かに、貨幣から想定されるアルハン勢力の再到來の時期を、ゲブルは 6 世紀後半としたが、その後、たとえばヴォンドロヴェッツはもう少し廣く 6 世紀後半から 7 世紀初頭と見ている。そうであるならアルハンの再到來というカーピシー/カーブル地域における重大な政治的事件と、ハイル・ハーナ神殿の主の入れ替わりという出來事が連續して起きた可能性は高くなる。

この點を敷衍するなら、從來うまく解釋できていなかった以下の點に解決の見通しが立つかも知れない。すなわち玄奘が訪れた際の迦畢試王、および 661 年頃に罽賓の王であつた曷曇支とは何者であつたのかという問題である。玄奘は、彼が訪れた時の迦畢試王が刹利種だつたと記す。この刹利は從來、クシャトリアを意味する、あるいは刹利と同じくソグドを意味するといった方向で解釋されてきた（cf. 水谷譯 1971: 49; 桑山編 1992: 167）。吉田豊によれば、この語はバーミヤーン王の稱號として漢籍資料やアラビア語資料に記録される *shir* と同様の音を寫した可能性が高いという（吉田 2013）¹⁴⁾。*shir* はガルチスターン王の稱號 *shār* やローブ王の *xār* などと同様、*xšaθriya* < *kṣatriya* に起源を持つ語であるが、もし刹利 = *shir* であるなら、7 世紀初頭のカーピシ王が言うならばバクトリア的王權文化・稱號文化の中に屬していた證といえるかもしれない。しかしより注目すべきは、7 世紀半ばの王曷曇支が馨孽なる人物を始祖とする王家の 12 代目であつたという『舊唐書』卷 198 の記録である（cf. 桑山 1991: 29）。馨孽は Khingila

幣學と歴史・考古學研究の食い違いは未だ大きい。Cribb 2010: 95-96 参照。

14) 吉田氏のご厚意により、出版前の原稿を参照させていただいた。記して謝意を表する。

を寫したものだと考えられているが、同じ名前は上掲のごとくターラカーン碑文に登場し、またいわゆるアルハン貨幣の發行者としても知られている。もしターラカーン碑文のヒンギラを漢籍資料に見える馨摩と同じ人物だと見るなら、5世紀後半に在位していた王から7世紀半ばまで、150年以上の間で王の交代が11回生じたというのは十分あり得る話だろう。ここに、アルハンの勢力が6世紀後半から7世紀初頭にかけてハイバル峠の西へと移動し、おそらくは既存の勢力、すなわちもともとネーザク貨幣を發行していた勢力の上に立ったであろうとする貨幣學研究による假説を組み合わせるなら、曷曇支は實はアルハンの家系に由來する支配者であった可能性が出てくる¹⁵⁾。もちろんヒンギラという名を持つ異なる支配者が何人かいた可能性は十分あるし、具體的にアルハン勢力の一部を率いて西へ移動したリーダーであったとされるナラナ(Narana)¹⁶⁾がヒンギラとどういう關係にあったのかはわからない。それでもハイル・ハーナ神殿の神格が穠那=ジューン神から太陽神へと入れ替わった事件において、新來の教團がスーリヤやアルナを崇拜するいわゆるインド系のものであったことを考え合わせるなら、この教團がアルハンに隨伴して、あるいはアルハンを追うようにしてガンダーラ方面からカーピシー/カーブルへと到來したという説明は成り立ちうるだろう¹⁷⁾。いずれにせよ、我々は貨幣研究と考古學や文獻研究の知見との間に少なくとも接點となる可能性がある事柄をここに見出すのである。

以上の通り、考古學や貨幣資料からは、4世紀を覆うシャープール2世の長い治世の後、ヒンドウクシュ山脈南側の地域の情勢に大きな變化・變動が起きたことがうかがわれる。残念ながらそのような變動の中でカーブルがどんな場所であったのか、どのような役割を果たしたのか、という点については現在のところ十分明らかではないが、考古資料は5世紀以降カーブルが、いくつかの重要な寺院を支えるだけの富を持つ規模のまち

15) ただしこのカーピシー王はその後7世紀に至るまでネーザクシャー貨幣を發行し続けているので、實際には「上に立った」というよりは「融合した」とするべきかもしれない。ヴォンドロヴェッツはこのことを踏まえて、重ね打刻貨幣を「Alkhan Nezak Crossover」と呼んでいる(Vondrovec 2010)。

16) Cf. Vondrovec 2010: 176.

17) アルハンの支配者達と太陽神信仰の關聯は明確にはわからないが、ミヒラクラ(Mihirakula) 治世の15年にMātrichêtaなる人物が太陽神神殿を建立したことを伝えるGwaliyorの碑文は、アルハンの支配者達、特に西歸したとされるナラナに直接先行する王ミヒラクラの時代に、彼の支配下の地域で、おそらくは王の是認のもと太陽神が祀られていたことを示している。この碑文についてはFleet 1888: 161-164 参照。なおこの点については小倉智史氏より教示を受けた。記して謝意を表する。

であったことを示し、また最新の貨幣學研究は6世紀から7世紀のカーピシー/カーブル地域の歴史に僅かながらも光をあてつつある。

3. 7世紀から13世紀

(1) 7-8世紀

カーブルおよびその周辺地域に関する情報量が飛躍的に増加するのは玄奘がこの地域を訪れた時である。620年代と640年代の2度、カーピシー/カーブル地方を通過した玄奘は、当時この地域の中心であった迦畢試（カーピシー）國についてはその有様を詳細に記録しているが、不思議なことにカーブルについては述べるところがない。カニンガムは、玄奘が歸路、漕矩吒から北上し迦畢試に至る間に通過した弗栗特薩儻那國とその主呂護苾那が、それぞれカーブルおよびその周辺地域を示すと考えるが¹⁸⁾、そうでなければカーブル地域には少なくとも玄奘の注意をひくようなまちはなかったことになる¹⁹⁾。ちなみにここで登場する弗栗特薩儻那は「突厥」の首長がおさめる場所だったという。

一方玄奘の旅の20年ほど後、おそらくは665年頃、南方スィースターン（Sistān）から進撃したイブン・サムラ（‘Abdullāh b. Samura）率いるアラブ・ムスリムの軍勢はザーブリスターンからカーブルに至りこれを征服した、とアラブの年代記作者バラズリー（al-Balādhuri）は述べる（Balādhuri: 489）。しかしその1年後、カーブルのまちはカーブルシャー（Kabul Shāh）によって奪還されたという。

さて、玄奘に遅れること80年餘り、インドから中央アジアを旅して中國へと戻った新羅の僧慧超は、カーブル川流域について次のように記している。

さらに迦葉彌羅國の西北、山の向こうへ一か月行程行くと建駄羅に達する。ここの王と軍はおしなべて突厥である。住民は胡種でバラモンもいる。この國はもとは罽賓王の治下にあった。そこで突厥王の阿耶が部衆、軍隊を率いてその罽賓王に身を寄せていたが、後に突厥が強力になると、すぐにその罽賓王を殺して自分で國王となった。（桑山編 1992: 38）

18) カニンガムは玄奘が地域名としてあげる弗栗特薩儻那がギリシア語資料の *Ortskana* < *Ortostana* にあたるまちなみであり、護苾那の方は *Kopen* を寫した、カーブル川流域の広い地域の名稱なのではないか、と考える（Cunningham 1979: 30）。しかしもちろんこの假説を積極的に支持するような證據は一つも知られていない。

19) ただし桑山は、玄奘の弗栗特薩儻那が実際にはカーブルを中心とする地方を指している可能性を指摘する。桑山 2002: 143 參照。

建駄羅はガンダーラで、迦葉彌羅＝カシミールから南下した慧超がこの地に入って記したのがこの文章である。注目すべきはここで王と軍が突厥であると言っていることで、しかも彼らはかつて罽賓王の家臣であったのが勢力を伸ばして篡奪したというのである。

實は上に述べたアラビア語資料に見えるカーブルシャーは、別名テュルクシャー (Turk Shāh), すなわちテュルクの王とも呼ばれている。つまりここで慧超が言う「王と軍はおしなべて突厥である」に符合する支配者はカーブルシャーだということになる。一方玄奘が訪れた時点では迦畢試＝罽賓の王はおそらく突厥ではなかった。また上述の7世紀半ばの罽賓王曷擲支は始祖から12代目であったというから、8世紀初頭に罽賓から建駄羅を統治していた新興の突厥王とは別物である。ということは、突厥によって王國を篡奪された罽賓王が7世紀前半から半ばにカーピシーを支配していた王、新たに支配者となった突厥王はアラブ軍からカーブルを奪回したカーブルシャー、すなわちテュルクシャーということになる²⁰⁾。

以上のできごとの詳細については桑山 (1990; 1993; 2000; 2002) および筆者 (稻葉 1991; 2004) によってすでに論じられているので就いて参照されたいが、カーブルのまちに關して言えば、この新しいテュルクの支配者の出現が大きな畫期になったと考えてよい。というのも、この時期以降アラビア語やペルシア語資料にはもっぱらカーブルがあらわれ、カーピシーが登場することはなくなるからである²¹⁾。これらを勘案すれば、7世紀半ばから後半にかけて、カーピシー/カーブル地域の支配者は、カーピシーに都を置いていた罽賓王から、カーブルに都を置いたテュルク系カーブルシャーへと移り変わり、カーピシーの方はその後衰退していったと考えられるのである。

(2) カーブルシャーの時代

カーブルシャーの王國はその後、9世紀に王統がテュルクからインド系の王家へと移り、ヒンドゥーシャー (Hindu Shāh) と呼ばれるようになった後も存続するが、カーブルのまち自體は後述のように10世紀末頃、ガズナ朝の手によって征服される。しかしそれまでの間、このまちはインドとイスラーム世界の境域の重要なまちとしてアラビア語・ペルシア語地理書に言及される。

20) 『舊唐書』に言う罽賓王の情報は、658年吐火羅道置州縣使として東方に派遣された王名遠が蒐集したものであると考えられる。詳しくは稻葉 2004: 367 参照。ただし桑山は玄奘往訪時、すでにカーブルはテュルク (Khalaj) の手に落ちており、弗栗特薩儻那はカーブルをも含む地域であり、『舊唐書』の情報が採集された時点ですでに罽賓はカーピシーではなくカーブルを指していた可能性もあると述べている (桑山 2001)。

21) ただし後掲注 23) を参照。

前近代のカーブル

9 世紀のイブン・ホルダーズビフ (Ibn Khurdādhbih) は

カーブルはトハリスターンの邊境 (thaghr) の 1 つである。それに屬するまちまちには Fār wāf, Azrān, KhWAS, Khushshak, KhBRH がある。カーブルにはアロエが産するが、最上のものではない。ココヤシ、サフラン、シトロネもある。というのもそこはヒンドの地に隣接しているのである。(Ibn Khurdādhbih: 37-38)

と記す。やや時代がくだって 10 世紀のイスタフリー (al-Iṣṭakhri), イブン・ハウカル (Ibn Ḥawqal) は

カーブルには堅固な城塞があり、そこに通じる道は 1 本だけである。そこにはムスリムがいる。まちには新市街 (rabad) があり、インド人の異教徒達がいる。ひとびとが信じるところによれば、カーブルにおいて王位が認證されない限り、Shāh は王位に相應しいとは認められない。彼が遠く離れた地にいる場合は、カーブルにやって来て、そこで彼に對して王位が認められるまでは、王に相應しいとは認められない。ここもヒンドの物資集散地 (farḍa) である。(Iṣṭakhri: 280)

カーブルのまちには難攻不落の内城がある。そこへは 1 本だけ道が通じている。そこにはムスリムたちがいる。まちのひとびとは新市街 (rabad) に住んでいる。そこには異教徒とユダヤ教徒がいる。ひとびとはカーブルにおいて王位が承認されない限り、王は Shāh の位には相應しくないと考えている。[カーブルから] 遠くはなれている者は、そこにやって来て、そこにおいて昔からのしきたりに乗っ取って Shāh の位につくことで相應しいと認められる。[ただ] そのようなしきたりが完全に守られているわけではない。ここもヒンドの物資集散地 (farḍa) である。(Ibn Ḥawqal: 450-451)

と、また 10 世紀にアフガニスタンのグーズガン (Gūzgān) で書かれたペルシア語地理書 *Hudūd al-‘Ālam* には

カーブルは小さなまち (shahrak) である。堅固さをもって知られる砦がある。そこにはムスリムとインド人がいる。まちにはいくつかの、偶像を祀る神殿がある。Kanawj の王の王權は、これらの神殿を巡禮するまでは十全なものとはならない。ここには王の旗が結ばれている。(Minorsky 1982: 111)

とある。10 世紀に書かれた 3 つの地理書に共通するのは、(1) カーブルの城塞の堅固さ、(2) インド王の即位儀禮がこのまちで行われること、の 2 点であり、またイスタフリー

とイブン・ハウカルはこのまちにムスリムが居住していると記している。地理書の情報が正確にいつの時点の状況を記録するものなのかを定めるのは困難であり、またそれぞれの作者が以前の著作を参照、引用しているためもあって、分析はさらに難しいが、カーブルの主がテュルクシャーからヒンドゥーシャーに切り替わった後も、このまちは重要な都として認識されていたことのこれらは現れであろう。

また 10 世紀までの間のカーブルのまちとその支配者は、アラビア語年代記資料にいくつかの出来事との関連で言及されている。

8 世紀初頭、ヒンドゥークシュの北、トハーリスターンにおいてタルハン・ネーザク (Tarkhān Nezak) 率いる反アラブ大反乱が起きるが、このときネーザクが家族や財産をあらかじめカーブルに送っておき、いよいよ劣勢になったときにはヒンドゥークシュ南麓を目指して逃れようとした、という話はタバリー (al-Ṭabarī) の史書に記録されている (Ṭabarī: ii, 1206, 1219)。カーブルシャーが反アラブ勢力の有力なメンバーとして意識されていたことのあらわれであろう²²⁾。

ついで 768 年、アッバース朝カリフ、マンスール (al-Manṣūr) の命により、フマイド・ブン・カフタバ (al-Humayd b. Qaṭṭaba) がカーブルを攻めたと記録されるが (Ṭabarī: iii, 369)、その顛末は不明である。

792 年、カリフ、ハールーン・アッラシード (Hārūn al-Rashid) の時代、バルマク (Barmak) 家のファドル (Faḍl b. Yaḥyā) は將軍イブラーヒーム (Ibrāhīm b. Jibril) をスィースターン總督に任じ、そこからカーブルを攻めさせた。この軍勢にはトハーリスターンの諸王、バーミヤーン (Bāmiyān) 王ハサン (al-Hasan al-Shir) も加わっていた。

この軍はゴールバンド (Ghūrvand) のまち、ゴールバンドの峠 (fajj Ghūrvand)、سد استان および سارحد،そして人々が大いに崇敬していたところの偶像が祀られていた Shāh Bahār を制圧した。偶像は破壊され、焼かれた。カーブルシャー [の統治下] のまちまちのうち、کاوسانの人々とその王 عفریکس،そして مازران و مبرحدの人々とその王達とがファドル・ブン・ヤフヤーのもとへ安堵を求めて來た²³⁾。彼らは安堵された。(Ya'qūbi: 290)

しかし残念ながらこの記事自体からはカーブルのまちがこの時征服されたのかどうかは

22) 8 世紀前半のカーブルシャー、フロム・ケサル (From Kesar) がアラブ軍と戦って大勝をおさめたらしきことは、彼の発行にかかる貨幣の銘文から知れる。稲葉 2010: 154-155 参照。

23) マルクヴァルトはここにあらわれる “Kāwisān” をカーピシーにあてる (Marqart 1901: 280)。

不明である²⁴⁾。

9世紀半ばに著されたアズラキー (Abū al-Walid Muḥammad al-Azraqī) の *Akḥbār Makka* には、814-15年カリフ、マームーン (al-Māmūn) の時代、カリフの命令によって *wazīr* のファドル (al-Faḍl b. Sahl) がカーブルに遠征軍を派遣し、この攻撃に降伏した当時のカーブルシャー MHRAB BNY DWMY の王冠と玉座がメッカ (Mekka) に運ばれたという内容の碑文が移録されている (Ghafur 1965-66; Rahman 1979: 85-86)²⁵⁾。降伏の證としてシャーはイスラームを受け入れたというが、しかしもちろんこれによってカーブル地方が恒久的にイスラーム化したわけではなかった。

ラフマン (A. Rahman) は、フンド (Hund/かつてのヒンドゥーシャー朝の都 Wayhand) 由来の幾つかの碑文および、近年マラカンド (Malakand) から発見されたザマルコト (Zamalkot) 二言語併記碑文の分析に基づき、カーブルにおけるテュルクシャー朝からヒンドゥーシャー朝への移行を822年のこととした。そしてアッパース朝軍に対するテュルクシャーの敗北と、その結果としての過重な税負擔の受諾とが、ヒンドゥーシャー朝の初代カッラール (Kallār) による王位篡奪と王朝交代の契機となったのではないかと述べている (Rahman 1993; 2005: 418)²⁶⁾。ヴェラルディ (G. Verardi) は最近の研究において、北西インドにおけるヒンドゥー教勢力拡大の波がカーピシー/カーブル地域にも早くから及び、8世紀半ば以降はカーブルもその影響を受けており、一方で北西インドにおける Vajrayāna の発展に對抗すべくヒンドゥー教が強化をはかり、そのことがヒンドゥーシャー朝成立の背景を準備したと論じている (Verardi 2012)²⁷⁾。

861年、スィースターンにおいてヤアクブ・ブン・ライス (Ya'qūb b. al-Layth) がサッフアール朝を建てる。864年以降彼はザープリスターンを攻め、同地の王ルトビール (Rutbil) をとらえて殺した。ルトビールの王子は脱出しカーブルに逃れたが、ヤアクブはこれを追って872年にカーブルを征服した²⁸⁾。サッフアール朝に征服されたカーブル

24) 実際には、このときカーブルのまち自體までムスリム軍は到達していなかったのではないかと考えられる。ここに見える Shāh Bahār の所在とあわせ、その詳細については稲葉 2013 参照。

25) この時、同時にメッカに送られたとされる、寶冠を被った佛像については Klimburg-Salter 2010 参照。

26) なお、ラフマンはヒンドゥーシャー朝の出自について、従来言われているようなバラモンの家系出身というのではなく、古くからガンダーラにいた地方領主 Oḍi/Uḍi 家 (Uddiyana やスワートの Udigram の語源と關わるという) に由来するのだとしている (Rahman 2005: 418)。

27) 北インドにおける Brahmanisation の進展とそのガンダーラへの影響全般については Verardi 2011 参照。

28) 前掲のイスタフリーヤイブン・ハウカルに見える、カーブルの「難攻不落の内城」にムスリム

はしかしながらまもなくヒンドゥーシャー朝の支配下に戻ったらしい。ラフマンによれば、898 年頃カーブルの南方に位置するガズニのまちがインドの王 Āṣata と Toramāṇa によって攻撃されており、この時点でカーブルがムスリムの支配下を離れていたと考えられるという (Rahman 1979: 111, 114; cf. 稲葉 1994: 236)²⁹⁾。

(3) ガズナ朝からモンゴルまで

カーブルが恒久的にムスリムの支配下に入るのはさらに 80 年の後、ガズナ朝の時代になってからである。962 年頃サーマーン朝の將軍アルプテギン (Alp Tegin) はホラーサーン (Khurāsān) を離れ、ヒンドークシュ山脈を南に越えた。カーブルの守備軍と戦った後、彼と彼の軍勢は、より南にあるガズニのまちを征服し、そこを據點として自立した。アルプテギンの死後、彼の息子や有力な將軍がこの軍團の指揮をとったが、977 年、ヒンドゥーシャーとの戦いの中で頭角を現したセビュクテギン (Sebük Tegin) が支配者となるにおよんでこの軍團は勢力を伸長し、997 年に彼が死ぬまでにヒンドークシュ山脈南麓からガンダーラ方面、さらに南方カンダハール、ブスト (Bust) 方面までをも支配することになった。この間カーブルがどの時点で征服されたのか、明確な日付や経緯はわからないが、986-87 年にセビュクテギン軍はカーブルの東、ラムガーン (Lamghān) 近邊でヒンドゥーシャー軍と戦いこれを打ち破っているから、カーブルがムスリムの支配下に定まったのはおそらくこの頃だったのだろう (稲葉 1994: 222-223)³⁰⁾。

セビュクテギンの後を継いだのが有名なガズナのマフムード (Maḥmūd) である。彼はカーブル川沿いのルートと、南方カンダハールからインダス下流域へと抜けるルートの二つを用い、積極的にインド遠征を行って多くの戦果をあげた。このマフムードのもと、

リムがいた、という記述はサッファール朝支配時代の状況を述べているのであろう。

- 29) ヒンドゥーシャーによるカーブル奪回が何時のことだったか正確に定めることは難しいが、事態をより難解にするのは、9 世紀末以降ヒンドークシュ山脈南麓においてムスリム貨幣が発行され続けたという事実である。稲葉 2013 参照。
- 30) イブン・ハウカルのカールに關する記述には興味深い内容が見える。そこにおいて著者は、「ハージブとその軍のそこ (カーブル) への入城」の結果として生じた混亂や、近隣の小領主達との抗争の結果、カーブルおよび周辺の民に、旧來の貢納金に加えて地稅、人頭稅が賦課されたこと自ら目睹したと述べている (Ibn Hawqal: 450) が、ここに見える「ハージブ」とは、直前の文章に見えるアルプテギンのことであろう。ミケル (A. Miquel) によればイブン・ハウカルは 969 年頃東方へ旅したというが (*ET*²: "IBN HAWKAL"), そうであるならカーブルへの「入城」がアルプテギンによってなされた可能性はより高くなる。すなわち、イブン・ハウカルの報告による限り、カーブルは一旦はアルプテギンによって落とされたことになる。しかしそれがガズニ征服前だったのか、征服後のことだったかはわからない。

東は北西インドから西はイラン高原西部、北はホラズムから南はアラビア海沿岸までの廣大な領域の中心となったのが都のガズニであった。中央アジア、南アジア、西アジアの間を往來する人や物の流れの中心としてガズニが榮えたことにより、カーブルの存在は supercede されてしまったかに見える。實際、同時代に書かれたペルシア語年代記にもカーブルはほとんど登場しなくなる。唯一マフムードの息子マスウード (Mas'ūd) の時代、インド遠征の際に軍がカーブルに營したこと、そこには象舎が置かれて、象が飼育されていたことが見えるのみである (Bayhaqī: 377; cf. Bosworth & Ashtiany 2011: i, 397)³¹⁾。

ガズナ朝は 1040 年、領土の西半分をセルジューク朝に奪われ、さらに 12 世紀にはアフガン中央山塊よりあらわれたゴール朝の勢力によってアフガニスタンの地を逐われる。ゴール朝はその後、ホラズムシャー朝との戦いの中で衰退し、アフガニスタン東部も同朝によって征服されるが、すぐにモンゴルの大征服が開始され、ホラズムシャーの王子ジャラル・アッディーン (Jalāl al-Dīn) を追うモンゴル軍がヒンドークシュ南麓にも到達した。モンゴル軍に對抗するために集結したホラズムシャー朝とゴール朝の遺臣達はガズニに據点を構え、その後カーブルの北パルワーン (Parwān) においてモンゴル軍と戦いこれを打ち破った (Juwaynī: ii, 194-95)。ここでもアフガニスタン東部の中心は未だガズニであり、カーブルはマイナーな都市として名があげられるのみである³²⁾。

さらにモンゴルの征服直前 (1200-1220 年頃?) に書かれたと考えられているナジブ・バクラーン (Muḥammad Najīb Bakrān) の地理書 *Jahān-nāma* にもカーブルは現れていない³³⁾。一方その 100 年餘り後に書かれたムスタウフィー (Hamdullāh Mustawfī) の地理書 *Nuzhat al-Qulūb* では、カーブルはまちの名前ではなく地方 (mamlakat) の名前として言及されており (Mustawfī: 261)、まちそのものについての説明や言及は見られない。

以上を概観するなら、7 世紀にカーブルシャーの王國が成立してから 250 年ほどの間、

31) やはりガズナ朝時代に年代記 *Zayn al-Akhbār* を表したギャルディーザー (Gardizi) も、イスラーム以前のペルシアの王達や、ウマイヤ朝、アッバース朝のホラーサーン・アミール達、サッファール朝やサーマーン朝の記述では何度かカーブルに言及するが、ガズナ朝時代の記述においてはカーブルに全く言及しなくなる。

32) いわゆる Karīmī 本の *Jāmi' al-tawārikh* にもカーブルの語は見えない。ただ、ロウシャン (M. Roushan) とムーサーヴィー (M. Mūsāwī) によるテキストでは Karīmī 本にはない一節が見え (Rashid al-Dīn: 522)、そこではチンギス・ハンがジャラル・アッディーンを追撃させるためにシキ・クトック・ノヤン (Shiqī Qūtūq Nūyān) らをガズニーン、ガルチスターン (Gharjistān)、ザーブル、カーブル方面に派遣した、という記述がある。前後の脈絡からして Karīmī 校訂本では文章の脱落がありそうなので、少なくとも同資料にカーブルは一度登場する、と言ってよいかも知れない。

33) ただし、*Jahān-nāma* はそもそもアフガニスタン東部の地名にほとんど言及しておらず、ガズニですらハラジュ・テュルクの項で一度現れるのみである (cf. Bakrān: 73)。

カーブルはそれ以前のカーピシーにかわってヒンドークシュ南麓のみならずアフガニスタン東部の中心であった。カーブル川沿いにガンダーラ方面にまで支配を及ぼしていたカーブルシャーの王国のもと、このまちが南アジアと中央アジア、西アジアの結節点として経済的にもきわめて重要であったことは、アラビア語地理書に同地を“farḡa”という言葉で形容していることからわかる。アラビア語の“farḡa”は通常「港」をあらわす言葉だが、内陸について用いられる場合もある。ある地域あるいは文化世界が他のそれと接触する場所において、様々な物資が集積され運び出されたり、あるいは逆に運び入れられたりする、そういう機能を持つ場所を示していると考えてよからう。ペルシア語地理書 *Hudūd al-‘Ālam* がカーブルの北バルワーンの地を「インドへの門」と呼んでいるのも同じ文脈で理解できる (cf. 稲葉 1994: 228-229; 2013)。

ところが10世紀後半ガズナ朝の成立によって状況は変化する。セビュクテギン、マフムード、マスウードの時代、イラン高原、北西インド、中央アジアにまで支配領域を広げた同朝の都としてガズニのまちは未曾有の大発展を遂げた。カーブル川沿いのルートと並んでカンダハールからスインドに向かうルートをも手中にしたガズナ朝は、ガズニの都において南アジア、中央アジア、西アジアの間を往來する人や物の流れをコントロールすることができた (稲葉 1994: 208-209)。カーブルはこのガズニの大発展の陰に隠れてしまい、歴史資料に十分な記述がなされないようなポジションに置かれたといつてよい。

その状況が再び変化するのはティムール朝時代になってからである。

4. 14世紀から18世紀

(1) イブン・バットウータ (Ibn Baṭṭūṭa) の記録

1333年、イブン・バットウータはその有名な大旅行の途上、ヒンドークシュを南に越えた。当時ヒンドークシュ山脈の南側はチャガタイ・ハン國のタルマシリン (Tarmashīrīn) の統治下にあり、彼の將軍であったブルンタイ (Buruntayh) がバルワーンに駐屯して統治にあたっていた (家島譯 1999: 181)。当時のカーブルについてイブン・バットウータは

その後われわれはカーブルに進んだ。そこには、過去において壯麗な町があったが、今では〈アフガーン〉と呼ばれる非アラブ人たちの一集團が濟む一寒村となっている³⁴⁾。彼らは山嶽地帯や隘路を占有し、強大な勢力を持っており、大部分は盜賊連

34) ここでいう「アフガーン」はもともと現在のアフガニスタンとパキスタンの國境近邊に居る

中である。彼らの據る大きな山は〈クーフ・スライマーン〉と呼ばれて、伝えられたところによると、神の預言者スライマーン——彼に、平安あれ!——がその山に登り、インドの地を見下ろしたところ、そこは闇黒であったので、そこに降りて行かずに、引き返したという。そこで、彼の名前に因んで、その山の名前が付いたのである。その山には、アフガンたちの王が住んでいる。(家島譯 1999: 218)

と記しており、未だカーブルが小さなまちに過ぎなかったことを教えてくれる。ただし、彼は同時にガズニについても

その後、われわれはガズナの町に旅した。そこは、世に名高いスルタン、アッラーの道に奮戦した人、サブクタキーンの子息マフムードの町である。彼は偉大なるスルタンたちの一人であって、〈ヤミーン・アッダウラ〉の尊稱を與えられた。彼は幾度となくインド地方に攻め入り、その諸都市や要塞を攻略した。彼の墓は、この町にあって、その傍らには一つのザーウィヤが建っている。しかし、この町の大部分はすでに廢墟となっており、かつての大規模な町も、今はほんの一部を除いて残っていない。(家島譯 1999: 217)

と記しているので、14世紀前半、ヒンドークシュ南側、東部アフガニスタンの地は度重なる戦亂のゆえにかつての榮華を失ってしまっていたということなのかもしれない。前掲の *Nuzhat al-Qulūb* はイブン・バットゥータの旅行とほぼ同じ時期に書かれた地理書だが、やはり「ガズニーン」は「小さなまち (shahr-e kūchak)」であると記している (Mustawfi: 146)。

(2) ティムール朝時代

14世紀末ティムール (Timūr) が中央アジア、西アジアの覇權を握ると、彼はカーブル方面をも支配下に入れた。特にそのインド遠征の際、カーブルは重要な宿驛として何度か資料に登場するようになる。一方ガズニへの言及はつとに少なくなる。

おそらくカーブルの發展にとって特に重要だったのは、ティムールによる灌漑事業と、その結果としてのまちの整備だったのだろう。1398年ティムールはインド遠征を企圖し、サマルカンド (Samarqand)、テルメズ、バグラーン (Baghlān)、アンダラーブ (Andarāb)

↓
住していた民で、玄奘がバンヌー (Bannū) からガズニに向かう途上、「阿薄健」として言及している者達と同一であろう (『慈恩傳』卷5: 孫・謝 2000: 115)。ガズナ朝やヘラートのクルト朝が同地への遠征を行っている (稻葉 1994: 216; 2002: 14)。

へと至った。ヤズディー (Yazdi) の *Zafar-nāma* には

Şahib Qirān 陛下は統治権を持つ王家のかの眼と灯火³⁵⁾の幸運なる耳を、忠告と助言の寶石で飾り、彼を抱き寄せて別れを告げ、神の明らかなる保護と援助にゆだねると、出発し、常勝の印たる旗印を彼の地より進發せしめ、幸運と吉祥とともにカーブル方面へと向かった。丘 (tall) 越えの道からヒンドゥークシュの山に登り、Bikheyr として知られる Bikh-e Shir で山を越え、カーブルまで 5 ファルサフの Bārān 平野の草地に下馬した。美德にあふれる至高の御前のいと高き志の鳥が、公正さと正義の羽でもって國々の修復と、神の僕たちの安寧という空を飛ぶと、この間、流水が流れている河谷から水路を掘削するよう命じられた。アミールたち、軍の全員が役割を分擔し、Ghurbān 川から 5 ファルサフの長さをもつ大きな水路をわずかな時間でほりあげた。それは Māhigir 川と呼ばれ、榮譽あるむらのいくつかがこれによって榮えた。そうして未耕地であったその谷は、すばらしい園と化したのであった。(Yazdi: ii, 31)

と記されている。加藤和秀によれば「Ghurbān の川」というのは明らかに、ヒンドゥークシュ南麓沿いを東流し、ベグラーム近邊でパンジシル川と合してカーブル川に注ぐゴールバンド川のことであるが、ティムールは軍全體に命令をして水路を掘削させ、カーブル周辺のむらむらを潤し、豊かな耕地を生み出したのである。加藤はティムールがホラーサーンやマーワラー・アンナフル (Mā warā' an-Nahr) と同様にカーブル近郊において大規模な灌漑工事を行ったことを、ティムールの統治政策におけるカーブルの重要性の現れであると指摘している (加藤 1971: 203)。これは言うまでもなく、北インドとティムールの本據である中央アジアを結ぶ重要な位置にこのまちがあったことによるのである³⁶⁾。

(3) バーブル (Bābur) およびムガル朝時代

このティムールの開発の成果はそのほぼ 100 年の後、彼の子孫であるバーブルの時代に花開いていた。バーブルは 1504 年カーブルを得、それから 1525 年までこのまちを活

35) ティムールの王子シャー・ルフ (Shāh Rukh) のこと

36) ちなみに現在まで知られている限りにおいて、mint としてカーブルの名称が刻まれる貨幣はティムール朝時代に初めて登場する (Diller 2009: ii, 971)。Schwarz 1995: 9-10 はこのことから、15 世紀以前のカーブルの存在は過大評價されているのではないかと疑うが、少なくともカーブル発行の貨幣の存在は、ティムール朝期以降カーブルが重要なまちとなった證と考えられよう。

動の據點とした。彼はその後インドを征服しムガル朝を建てるわけだが、彼自身の墓はカーブルにある。バーブルはその自叙傳の中でカーブルについて極めて詳細な記録を残している。叙述の細かさという点では、それまでのいかなる文献資料とも比べものにならないものであり、これに類する内容の記録が残されるのはようやく19世紀、イギリス人が同地に入った後のことである。

バーブルは以下のように述べている。

カーブル地方は第四氣候帯に屬する。人の多く住む地帯の中央に位置する。東はラムガーナート、プルシャーワル、ハシュナガル、そして若干のヒンドの諸地方である。西はクーヒスターンで、その中にギゼーウとゴールが含まれる。現在ハザーラ族とニクダリー族の隠れ家と居住地がこの山々である。北はクンドゥズとアンダラーブの諸地方である。ヒンドゥー・クシュ山脈が〔カーブルとこれらの地方の〕間にある。南はファルマル、ナガル、バンヌーとアフガーニスターンである。

〔カーブル〕小さな地方である。細長い地方である。東から西に向かって、細長く延びている。周囲は全て山である。その城市は山に接続している。城市の西南の方角にやや小さな山がある。その山の頂上に、カーブル王が建物を建てたために、人々はこの山をシャーヒ・カーブルと呼んでいる。この山は、ディーヴリーン隘路にはじまり、デヒ・ヤークーブ隘路でおわっている。その周囲は2シャルイーであろう。この山の麓は全て庭園である。

〈中略〉

〔交易〕 ヒンドゥスターン人はヒンドゥスターン以外の地をホラーサーンと呼んでいる。アラブ人がアラブ以外をアジャムと呼んでいるのと同様である。ヒンドゥスターンとホラーサーンの間の陸路上に、2つの交易の中心地がある。すなわちカーブルとカンダハールである。フェルガーナ、トゥルキスターン、サマルカンド、ブハーラー、バルフ、ヒサール、バダフシャーンから隊商がカーブルに来る。ホラーサーンから隊商がカンダハールに来る。ヒンドゥスターンとホラーサーンの中に立つのがこの〔カーブル〕地方である。

まことにすばらしい交易地である。もし商人たちが中國とカルームにおもむけば、この地であげられるのと同程度の利益を〔やっと〕あげる事ができる。毎年7~8千ないし1萬頭の馬がカーブルにもたらされる。下のヒンドゥスターンから1萬~1萬5千ないし2萬家族の隊商がカーブルへ来る。ヒンドゥスターンの商品としては、奴隸、白い布地、砂糖菓子、精糖、〔普通の〕砂糖、芳香根がもたらされる。多くの商

人たちは、3~4 倍程の利益では満足しない。カーブルでは、ホラーサーン、イラーク、ルーム、チーンの商品が見られる。カーブルはまるでヒンドゥスターン自身の交易の中心地である。(間野譯 1998: 199-202)

ここにはインドと中央アジアの交易の據點として發展の途上にあるカーブルの姿が描き出されている。一方、かつてカーブルをしのぐ繁榮をほこったガズニは、パーブルが

ガズニーはまことに貧弱な土地である。私はいつも、ヒンドゥスターンとホラーサーンをその支配下に収めた君主たちが、ホラーサーナートがあるというのに、どうして、このような貧弱な土地を首都に選んだのか、と不思議に思っていた。(間野譯 1998: 218)

と記す有様で、イブン・バットゥータが訪れたときよりもおそらくさらにさびれていたようである。

この後、カーブルはアフガニスタン東部の中心としての地位を2度と失うことはなく、ムガル朝時代にはかわらず中央アジア交易の重要據點として築えた。ムガル朝第3代アクバル (Akbar/位 1556-1605 年) の著名な宰相であるアブー・アルファドル (Abū al-Faḍl) の著作である *Ā'in-e Akbari* はカーブルについて次のように記している。

ヒンドウークーフ (ヒンドウークシュ) はカーブルをバダフシャー (Badakhshān) およびバルフと距てている。往來するトゥーラーン (Tūrān) の民が用いる道は7本ある。3つの道はパンジヒール (Panjhir) 溪谷を通じ、最も高い〔峠越え〕はハワーク (Khawāk) 峠。次に高い峠は Tūl, その次が Bāzarak である。それらのうち最もよい道は Tūl であるが、その名が示す通りやや距離が長い。最も直線的な道はバーザーラクを越えるそれである。高い山並みとパルワーンの間にはさらに七つの峠があり、それらは Haft Bachcha と呼ばれている。アンダラーブからは2本の道が上ってきて、高い峠の下で1つに合流し、ハフト・バッチェから〔パルワーン〕へと出てくる。大層苦勞する道である。他の3本の道はゴールバンド溪谷を通り、パルワーンへ向かう。最も近いのは Bā'iki Būl (Yangi-Yuli) 峠を通るもので、ワリヤーン (Waliyān) とヒンジャー (Khinjān) へと通じる。別のものは Qibchāk 峠を越えるもので、やはりそれほどきつくはない。第3の道はシバルトゥ (Shibartu) 越えである。川の水かさが増す夏には人々はこの峠から、パーミヤーン、ターラカーンへと下っていくが、冬期には Ābdara 道が用いられる。というのもその季節には3、4ヶ月の間、これ以外の道は全て閉ざされてしまうのである。またホラーサーンからはカンダハー

ルへ至る道もある。これはまっすぐの道で峠もない³⁷⁾。

ヒンドゥースターンからは5本の道が用いられる。

1. Karapa。2つの峠を抜けてジャラーラーバード (Jalalābād) へ通じる。先君 (バーブル) はこの道に言及していないので、その頃には通れなかったに違いない。
2. ハイバル (Khaybar) 道。かつてこの道はやや険しかった。しかし陛下の命令により荷車による輸送でも通行可能なように改修され、いまではトゥーラーンやインドの旅行者達がここを往來するようになっている。
3. バンガシュ (Bangash)。Dhankot の渡しでインダスを渡り [到達する]。
4. ナガル (Naghar) 道。
5. ファルムル (Farmul) 道。Chaupāra の渡しでインダスを渡り [たどり着く]。

(Abū al-Faḍl: i, 590; cf. Jarrett 1978: ii, 405-406)³⁸⁾

カーブルのまちは第4気候帯に属している。経度は104度40分、緯度は34度30分である。それは古いまちまちの中でもっとも素晴らしいものの1つであり、Pashangの時代に基礎が置かれたと言われている。そこには二重の土塁を巡らした堅固な城市がある。城市の西南³⁹⁾に、恵みをもたらす低い丘がある。それは古の王の1人が基礎を定めたもので、それにちなんでシャー・カーブル (Shāh Kābul) と呼ばれている。この城市の内城がその丘の頂にある。‘Uqābayn と呼ばれる突出部が分かれ出ている。その突出部には高くなっている部分があり、王家の所屬とするよう命令されたのである。城の足下は立派な圍い堀、心弾む草地、うっとりするような庭園があり、なかでもシャフル・アーラー (Shahr Ārā) [はとりわけすばらしい]。2本の川がまちを心地よいものとしている。1つはLalandarから流れ込み、シャフル・アーラーを抜けてまちを流れる川で、Jūy-e Khaṭībān と呼ばれる。もう1つはDeh-e Ya’qūbの隘路から發し、デリー (Delhi) 門を経てDeh-e Ma’mūraへと流れる。Jūy-e Pul Mastān と呼ばれ、前者よりも清明で澄んでいる。その近くにはMahum Anaga と呼ばれる運河が設けられている。これはたいそう便利である。それに隣接するのがGulkana街區で、目に心地よく、心を楽しませる場所である。[シャー・カーブルの] 丘からまちに向かって3本の水路が流れている。その1本の出發點に

37) ヒンドゥークシュ山脈越えの峠道については稲葉 2013: 11-14 も参照。

38) 東部アフガニスタンからインダス流域へ抜ける諸道については、稲葉 2002 参照。

39) 原文は NYRT RWYH だが、バーブルの同様の記述をもとにこのように譯した (cf. 間野譯 1998: 199)。

は Khwāja Hamū という名の廟がある。第2の水路には Khwāja Khidr の聖足跡があると人々が信じる場所がある。第3の水路は Khwāja Rūshanaʿī として知られる Khwāja ‘Abd aṣ-Ṣamad [の廟] の向い側にある。

古の賢人は、カーブルとカンダハールをヒンドゥスターンへの2つの門だと考えた。一方はトゥーラーンの地へ、他方はイーラーンの地へ通じるのである。ヒンドゥスターンのこの2つの入り口を護ることによって、異邦の者[の侵入から]安全となるのであり、世界を巡る旅人にこそこの2つの道はふさわしい。(Abū al-Faḍl: i, 592; cf. Jarrett 1978: ii, 407-409)

記述内容の大筋は、バーブルのそれを踏襲しているが、特に上に引用した最後の一文において、カーブルがまさしく「ヒンドゥスターンへの門」と述べられているのは、交易ルートの重要な結節点としてのこの当時のカーブルの位置をよくあらわしていると言えよう (cf. Levi 2002: 39)。

ところで、カーブルにおけるその後のイスラーム文化の発展に関わる興味深い資料が知られている。ナクシュバンディー教団にかかわるワクフ文書である。著名なナクシュバンディー教団のシャイフ、ホージャ・アフラル (Khwāja Ahrār) の曾孫が自分の子孫および宗教施設に對して行った寄進に関するこの文書は、チェホヴィッチ (О. Д. Чехович) の *Самаркандские документы, XV-XVI вв.* に文書番號 17 としておさめられている。この文書を分析したデール (S. Dale) とパーインド (A. Payind) によれば、ホージャ・アフラルの家系の所有に歸していたこれらの不動産がいつ頃彼らのものとなったのかはなお定めがたいながらも、ホージャ・アフラル系統のナクシュバンディー教団が、バーブルやその息子フマーユーン (Humāyūn) と婚姻関係等で結びつき、カーブルに財産を殖やしていった事が、その後の教団の北インド進出、とりわけバーキー・ビッラー (Baqī Bīllāh) や、アフマド・スィルヒンディー (Aḥmad Sirhindi) 以降のムジャッデディー (Mujaddidi) 家の活発な活動の基盤を與え、またムジャッデディーがその後アフガニスタンにおいて大いに廣まる契機となったのではないかという⁴⁰⁾。

その後、ドゥッラーニー朝の成立やカーブルにおけるドゥースト・ムハンマド・ハーン (Dūst Muḥammad Khān) の自立以後の状況については、1808年から09年にカーブルを訪れた後のボンベイ總督エルフィンストン (M. Elphinstone)、北西インドからアフガニス

40) Dale & Payind 1999: 226-233。ただし、川本正知はこのカーブルのワクフ物件はホージャ・アフラル自身とは全く関連がなく、後代有名なシャイフの名に假託して設定されたものではないかとする (川本 2005)。なお、このワクフ文書とそれに関わる研究の現状について、川本氏より詳細なご教示を受けた。記して謝意を表する。

タン東部を踏破し、きわめて詳細な記録を残したマッソン (C. Masson)、1831 年から 33 年のプハラ使節行の途上と、1837-38 年のカーブル使節行の 2 度カーブルを訪れたバーンズ、マッソンやバーンズと同じ頃にガズニやカーブルを訪れたヴァイン (G. T. Vigne)、その他のヨーロッパ人達の記録がある (Elphinstone 1815; Masson 1842; Burnes 1834; 1842; Vigne 1839; 1840)。また第一次アングロ・アフガン戦争 (1838 年) 以後については、イギリスによるきわめて多岐にわたる調査と記録が行われているが、今それらに言及するいとまがない⁴¹⁾。また冒頭で觸れた『イラン百科事典』の「カーブル」の項で、シナスイ (M. Shinasi) が 16 から 20 世紀のカーブルの歴史について、またド・プラノールがアフガニスタン王国成立以降の歴史地理について詳細に論じている。それらを参照するに、總體として中央アジア、南アジア (そしておそらくは西アジア) という異なる歴史世界間の重要な接点としてのカーブルの地位に大きな変化はなかったと言ってよい。そのことは、他ならぬこの場所が英露のグレートゲームの舞臺になったことに最も端的に現れているのみならず、ウィルソンやカニングムら、この地域の古代史研究のパイオニア達の研究がそのような視點から行われていることによっても明らかである。

5. 東部アフガニスタン

以上、雑駁ではあるが、文献、考古、貨幣資料から前近代カーブルの歴史を辿ってみた。本文で述べてきたことが大きく誤っていないようであれば、以上の事柄から、ヒンドークシュ南側の地域における 3 つの歴史的な都市、すなわちカーピシー、カーブル、ガズニの関係について興味深い推論を行いうるようになる。以下少し述べておきたい。

文献資料がほとんどない 7 世紀以前をひとまず措くとして、7 世紀、カーブルシャーの王国の成立により、ヒンドークシュ南麓、カーピシー/カーブル地域の中心はカーピシーからカーブルに移行した。カーブル川沿い、ヒンドークシュ越え、アフガン中央山塊へのアプローチ、と交通の結節点を占めたカーブルは、インド世界と非インド世界との接点として榮えた。逆にカーピシーの方は廢れてしまい、その後かつての都の近邊に大きな都市が營まれることはなかったらしい。

ところが 10 世紀にガズナ朝が成立し、ガズニのまちを中心として西アジア、南アジア、中央アジアの間を行き交う人や物の流れをコントロールするようになると、ガズニの陰

41) Bleaney & Gallego (2006) はアフガニスタンに関する文献の包括的カタログであり参照に値する。

に隠れてカーブルは往時の繁榮を失ったように見える。この状況は 14 世紀後半、ティムールがカーブルをヒンドークシュ南方の支配據點と定め、開發を行うまで續いたようである。しかし一旦カーブルが發展しはじめると、かつての都ガズニは衰退し、16 世紀初頭にはバーブルによって「寒村」と評される状況になる。

要するに 7 世紀以降はカーブルとガズニの 2 つのまちが、現在のアフガニスタン東部、ヒンドークシュ山脈南側の據點都市の座を交代で占めたのである。逆に言えばこの地が 2 つの大都市を同時に持つことはなかったわけであるが、その背景を正確に解明することは今できない。ただ、大都市を成立させる基本的條件として一定以上の農業、あるいは第一次産業による生産力があり、それによって支えられる（あるいはそれを支える）一定以上の人口が必要とされる、と考えるなら、大都市が兩立しなかったという状況の背景として、この地域の農業生産力の上限の低さや、地域經濟に占める交易の重要性、という要因を考えることができるかもしれない。たとえば前出のバーブルは、交易の據點としてのカーブルの優越性に言及する一方で、

サマルカンド、ヒサール、クンドゥズから多くの部民・部族がカーブル地方に来ていたため、次のような方針が決定された：「カーブルは貧弱な土地である。武力で治めるべき土地であり、文治に適した土地ではない。全ての人々に、現金を徴収して支給することは不可能である。これらの部民・部族の家族には、それぞれ穀物を支給し、皆は遠征ないし略奪に出發する事とする。」と。このように決定され、カーブルとガズニ地方およびその屬地に對し 3 萬ハルワールの穀物が課された。カーブルの収入と收穫がどの程度であるかを知らぬまま、これほどの多額を課したため、地方はきわめて荒廢した。（間野譯 1998: 226-227）

と記し、その農業生産力が決して高くはなかったことを示している⁴²⁾。桑山によるヒンドークシュ西足ルートの興隆とバーミヤーンの發展に關する卓越した考察（桑山 1985）を参照するなら、重要な交易ルートがなんらかの原因で變化した場合、それが交易の中繼點としての都市の興隆と衰退に直接的に影響を與えるという状況はこの地域においてある程度一般的であったと考えられる。そうしてその意味ではガズニよりもおそらくは

42) *Ā'in-e Akbari* によれば、カーブル地方からの稅收（現金徴收額）は 8050 萬 7465 ダーム。これはカシミール地方の稅收 6211 萬 3040.5 ダームとそれほど變わない額である。ここでいうカーブル地方には、東はナガラハラ（Nagarahara）、西はゴールバンド、バーミヤーン、北はアリーシャング（'Alishang）、パンジヒール（＝パンジシール）、南はガズニまでの地域が含まれていることを勘案すれば、きわめて豊か、という形容詞をあてはめることは難しい。Abū al-Faḍl: i, 571, 592; cf. Jarrett 1978: ii, 367, 413-415.

カーブルの方がより優れた立地を有していたであろうことは、ボンバーチ (A. Bombaci) やボズワース (C. E. Bosworth) の次のような感想にも示されているところである。

おそらくは過去には現在よりもよく灌漑され、繁榮していたであろうガズニ地方は
広い領域にわたって、最も恵まれた地方の一つである。しかしながら、豊かさにお
いては、バルフ、ヘラート、カーブル、カンダハールの沃野には比すべくもない。
大帝國の首都に必要とされるものを持っていないのである。實際、同地は政治的に
は、より豊かな北東地方、或いは南西地方に従属する運命にあるように思われる。
このような印象は、そこの人々や土地のことを十分に理解していた、ムガル朝の創
始者バーブルの評価によっても裏付けられる。彼はそのメモワールの中で、このよ
うな貧しい土地が、インドやホラーサーンの國々を支配した帝王達の首都であった
という事實に対する驚きを記している。實際、我々がこれから見ていくように、例
外的な状況のみが、ガズナ朝下でのガズニの幸運 —— それも短命な —— を説明で
きるのである。(Bombaci 1957: 247)

10 世紀の地理學者達はガズナを、ホラーサーン、トランスオクシアナとインドを結
ぶ交易の物資集散地 (furaq) の一つであると述べてはいるが、その經濟的役割はそ
の點においては決してカーブルのそれほどには重要ではなかった。(Bosworth 1973:
36)

さて、このような状況がこの地域に特有の環境によるものだと考えるなら、その枠組
みを資料に乏しい 7 世紀以前の状況について援用することができるのではないか。

先に見たように、カーブル近邊において現在まで一應の見解が提示されるほどに調査
された遺跡群はどれだけ早くとも 4 世紀、おそらくは 5 世紀以降という年代を與えられ
ている。もちろんこのことのみによって 4 世紀以前のカーブルの存立について議論する
ことはできないのだが、150 km ほど離れたカーブルとガズニの間に「兩都市並び立た
ず」という関係がもし成立するのであれば、カーピシー/カーブル盆地内の南北 2 つの都
市、カーブルとカーピシーの間にも同様の状況があったと考えることは容易い。先に述
べたように兩者の間は直線距離で 50 km 餘りであり、しかも交通を妨げるような険しい
地形も間にはない。それゆえ、ヒンドゥークシュ山脈を越えて往來する人々、流通する
品物や情報を、このどちらの都市からもコントロールすることができたと考えて良い。

1 つの手がかりを提供するのは他ならぬベグラム遺跡の年代であろう。かつてのカー
ピシー大都城であるところのこの遺跡はフランス考古學派遣團によって發掘調査が行わ
れ、ギルシュマン (R. Ghirshman) はその成果に基づいてこれをおおよそ 3 つの時期にわ

けた。すなわち、第Ⅰ期が前1世紀から後1世紀（インド・グreek末期からクシャーン朝初期）、第Ⅱ期を2から3世紀（カニシカ時代以降）、第Ⅲ期を4-5世紀と考えたのである（Ghirshman 1946: 41）。しかしながら玄奘三蔵の記録と考古資料を綿密に比較照合した桑山によって、ベグラーム第Ⅲ期こそが玄奘の見たカーピシー大都城に他ならないことが明らかにされた結果、ベグラーム遺跡そのものの通時的解釈は大きな修正を必要とする事となった（桑山 1989; Kuwayama 2010）。さて、ギルシュマンの見解と桑山による年代修正を勘案するなら、ベグラーム第Ⅱ期と第Ⅲ期の間にはある程度の時間のギャップが存在することになる。桑山は第Ⅲ期の始まりを早くとも6世紀頃と見ているが、これに従うなら現在の知見ではベグラームの第Ⅱ期と第Ⅲ期の間には200年ほどの断絶があったと考えられるのである。この点については、第Ⅱ期以前に関する新たな研究がない現状で確定的な議論をすることはもとより不可能だが、それにしてもフスマンや桑山が示すカーブル周辺の遺跡の建造年代である4-5世紀頃というのが、このベグラームの断絶期にうまくはまりそうなのは興味深い。

上述のようにカーピシー＝ベグラームとカーブルの間は直線距離では50 km 餘りしか離れていない。南アジアと中央アジアを結ぶ道の重要な結節点としての地位は、カーピシーの名が資料から消え去った8世紀以降、もっぱらカーブル（10世紀以降はガズニ）によって占められたが、7世紀玄奘が訪れた際、その地位にあったのはカーピシーであった。ここからカーピシーとカーブルについて、それを1つのペアと考え、どちらかがカーピシー/カーブル地域の首邑の位置を交代で占めていたのではないかと推測するなら、インド・グreek時代の末期からクシャーン初期、およびその末期まではカーピシーが栄え⁴³⁾、その後一旦カーブルが繁栄する時期がやってきて、6-7世紀頃に再びカーピシーが大きく栄えた時期が来たのだ、と想定することができる⁴⁴⁾。

43) 前述のごとく、紀元前後の状況についてはすでにカニングガムが、オルトスパナが元来ヒンドゥークシュ南側/カーピシー＝カーブル地域の中心都市であり、それがギリシア支配時代にアレクサンドリアにとってかわられ、インド・サカ時代の初期に復活したのだろうと述べている（Cunningham 1979: 15）。ベグラーム発掘調査以前の見解であるため、ギルシュマンの年代観とは少々齟齬を来すが、それでもこの地域における首邑の交代という事象に早くから注目しているのは興味深い。

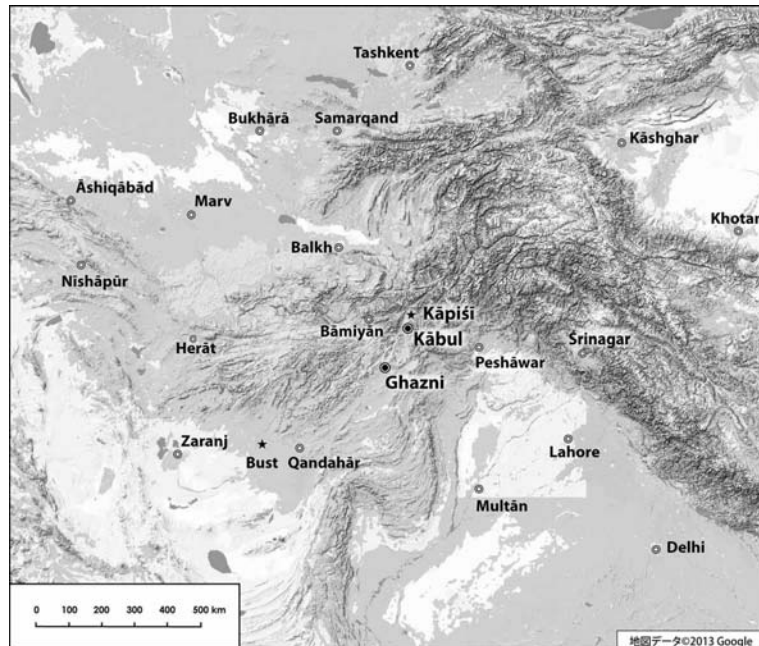
44) 先に述べた、ハイル・ハーナ神殿におけるジューン信仰教団の追放と、太陽神信仰神殿の新たな建立という事件を再び取り上げるなら、以下のような考察も可能かも知れない。本文中でも述べたように、アルラムによれば当初ザープリスターン方面で貨幣を発行していたネーザクシャーが、北方カーピシー/カーブル方面へと勢力を伸ばしたのを6世紀の第1四半世紀のことと考えられるという。しかし上に見たようなカーピシーの再興とカーブルの関係を考えるなら、このときネーザク勢力が據点を置いたのは果たしてカーピシーだったのか、カーブルだったのか。カーピシー＝ベグラームの第Ⅲ期の始まりは上述の如くは

このような想定はもちろん假定に假定を重ねたものであるが、それでもほとんど謎に包まれているイスラーム化以前のカーピシー/カーブル地域の歴史について今後、様々な断片的材料を検討する際に一つの手掛かりを提供してくれるだろう。少なくともこのように考えることによって、本文中で觸れたように時代や資料の性格によってその指し示す位置が定まらない漢籍資料の屬實の問題も、中心都市が時々の環境によって交代する、というアフガニスタン東部、ヒンドークシュ山脈南麓地域の特性と関連づけて理解することができる。

このことは言うまでもなく、南アジア、西アジア、中央アジアの接する境界領域に位置するカーブル（あるいは廣く東部アフガニスタン）の地勢と環境に深く関わっている（地図3参照）。そこでは當然のことながら異文化世界との交易活動が活発に行われていた。玄奘ら中國僧も、あるいはアラブの地理學者達も、カーピシー/カーブル地域における商業活動の活発な有様を描寫している。そのような地理學者の1人イスタフリーは、前掲の如く9世紀末から10世紀初めにかけて、カーブルのまちにムスリムとヒンドゥーとがともに暮らしていたことを報告している。一方、パイマンによればテペ・ナーレンジ佛教寺院が最も擴張され發展した第二期は、サッフアール朝による征服が行われた前後に始まるという（Paiman and Alram 2013: 73-78）。すなわちムスリム支配下において、あるいはその後のヒンドゥーシャーの支配期においてカーブルに大規模な佛教寺院が営まれていた時期があったことになるのである。さらに、そのような多様な宗教の混在だけでなく、同地でイスラーム時代以前に發行された貨幣には、バフラヴィー文字、バクトリア文字、ブラフミー文字が用いられ、その銘文を讀む側の言語の多様さが反映されている。多様な文化、信仰、言語を持つ者達が活発な經濟活動こそが、政治勢力の消長と複雑に絡み合いながら、東部アフガニスタンの大都市の變遷の一つのバックグラウンドを形成していた、と考えてもそう大きく過たないだろう。

以上のごとく、カーブルの歴史をどのようにとらえるかという觀點には、歴史と文化

やくても6世紀のことであり、さらに大發展を遂げるのは西突厥がエフタル（Genuin Hephthalites）に對して勝利をおさめる6世紀半ば以降のことである。この時代的枠組みは貨幣から想定されるアルハンの西歸とおおよそ重なり合うように見える。一方これも上述の如く、フェスマンはカーブルの主要佛教遺跡が増廣を受けたのが軒並み5世紀以降のことだと見ている。これがカーブルの經濟力の伸長を反映しているのであるなら、6世紀初頭に南から勢力を伸ばしたネーザクシャーが手に入れた可能性が高いのはカーブルの方であったかもしれない。そこへ到來したアルハンは、カーピシー/カーブル地域の北の中心であるカーピシーに據點を置き、そこからカーブルのネーザク勢力を屈服させたのではなかったか。カーブル北側の丘に位置するハイル・ハーナで神格の交代が生じたのは、まさにその結果とみることができるかもしれない。



(Google Map 提供地形図をもとに作成)

地図3：南アジア・中央アジア・西アジアの接点としての東部アフガニスタン

の接触する場所としてのアフガニスタン，とりわけヒンドークシュ山脈の南北，という環境が大いに関わって来そうである。アレクサンダー・バーンズは別の箇所で

人々は皆，カーブルが非常に古く，6000年前からの都市だと言っている。カーブルはかつてガズニとともにバーミヤーンに服属していた。奇妙なことに状況は逆轉し，11世紀マフムードのもと，ガズニが大いなる都となった。そして今やカーブルがガズニとバーミヤーンをしのいで一大都市となっている。(Burnes 1834: i, 147-48)

と記しているが，ここまで述べてきたようなことがらが成り立つとすれば，バーンズははからずもこの地域の歴史環境の本質に言及していたと言えるのではなかろうか⁴⁵⁾。

45) 前掲のボンバーチ，ボズワースの兩者とも，ガズニが東部アフガニスタンの中心地となったのは特殊な状況の下でのことである，と評價していることには注意してよい。この點はすでに稲葉 1994 にて論じたが，それにしてももともとカーピシー/カーブルとは距離も離れ，古來別の國（玄奘を例にとれば迦畢試と漕矩吒）を形成していたガズニが，たまたまこの大都市交代のサイクルに加わったことによって，自然環境以外の要素に左右されて都市が興隆し衰亡するというこの地域の歴史的特性が，より浮き彫りになったと言えるかも知れない。

参考文献

一次資料

- Abū al-Faḍl : Abū al-Faḍl ‘Allāmī, *Ā’in-e Akbarī*, 2 Vols., ed. H. Blochmann, Calcutta, 1877.
- Ammianus Marcellinus : J. C. Rolfe (tr.), *Ammianus Marcellinus*, 3 Vols., Harvard University Press, rep. 1972.
- Bakrān : Muḥammad b. Najīb Bakrān, *Jahān-nāma*, ed. M. A. Riyahi, Tehran, 1963.
- Balādhurī : al-Balādhurī, *Futūḥ al-Buldān*, ed. Ṣalāḥ al-Dīn Munajjid, al-Qāhira, 1956.
- Bayhaqī : Abū al-Faḍl Bayhaqī, *Tārikh-e Bayhaqī*, ed. ‘A. A. Fayyāḍ, Mashhad, 1977.
- Ibn al-Balkhī : Ibn al-Balkhī, *Fārs-nāma-ye Ibn al-Balkhī*, ed. G. Le Strange & R. A. Nicholson, London, 1921.
- Ibn Ḥawqal : Ibn Ḥawqal, *Kitāb Ṣūrat al-‘Arḍ*, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1967.
- Ibn Khurdādhbih : Ibn Khurdādhbih, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, ed., M. J. de Goeje, Leiden, 1967.
- Iṣṭakhrī : al-Iṣṭakhrī, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, ed., M. J. de Goeje, Leiden, 1967.
- Juwaynī : ‘Alā al-Dīn ‘Aṭā’ Malik al-Juwaynī, *Tārikh-e Jahāngushāy*, 3 Vols., ed., Muḥammad Qazvinī, Tehran, 1911.
- Mustawfī : Ḥamdullāh Mustawfī, *Nuzhat al-Qulūb*, ed. by G. Le Strange, Leiden, 1915.
- Rashid al-Dīn : Rashid al-Dīn Faḍl Allāh, *Jāmi’ al-Tawārikh*, 4 Vols., ed. Muḥammad Roushan, Tehran, 1373 AH.
- Ṭabarī : al-Ṭabarī, *Ta’rikh al-Rusul wa al-Mulūk*, 3 ser., ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1879–1901.
- Ya’qūbī : al-Ya’qūbī, *Kitāb al-Buldān*, ed., M. J. de Goeje, Leiden, 1967.
- Yazdī : Ashraf al-Dīn ‘Alī Yazdī, *Zafar-nāma*, 2 Vols., ed. Muḥammad ‘Abbāsī, Tehran, 1957.
- 『慈恩傳』：孫毓棠・謝方點校『大唐大慈恩寺三藏法師傳 釋迦方誌』中華書局，2000。

二次資料

- Afram, M. (1996) Alchon und Nēzak : Zur Geschichte der iranischen Hunnen in Mittelasien. In : G. Gnoli et al. (eds.), *La Persia e l’Asia Centrale da Alessandro al X secolo*, Rome, 517–554.
- Afram, M & M. Pfisterer (2010) Alkhan and Hephthalite Coinage. In : M. Afram et al. (eds.), *Coins, Art and Chronology II : The First Millennium C. E. in the Indo-Iranian Borderlands*. Vienna, 13–38.
- Ball, W. (1982) *Archaeological Gazetteer of Afghanistan*. 2 vols., Paris.
- Bleaney, C. H. & M. A. Gallego (2006) *Afghanistan : A Bibliography*. Leiden.
- Bombaci, A. (1957), Ghazni. *East and West* 8 (3), 246–259.
- Bosworth, C. E. (1973), *The Ghaznavids*. 2nd ed., Beirut.
- Bosworth, C. E. & M. Ashtiany (tr.) (2011), *The History of Beyhaqi*. 3 vols., Washington D. C.
- Boyce, M. (1968), *The Letter of Tansar*. Roma.
- Burnes, A. (1834), *Travels into Bokhara*. 3 Vols., London.
- Burnes, A. (1842), *Cabool*. London (Posthumous).
- Casson, L. (1989), *The Periplus Maris Erythraei*. Princeton.
- Чехович, О. Д. (1974), *Самаркандские документы XV–XVI вв.* Москва.
- Cribb, J. (1990), Numismatic Evidence for Kushano–Sasanian Chronology. *Studia Iranica* 19 (2), 151–193.

- Cribb, J. (2010), The Kidarites, the Numismatic Evidence. In: M. Alram et al. (eds.), *Coins, Art and Chronology II: The First Millennium C. E. in the Indo-Iranian Borderlands*, Vienna, 91–146.
- Cunningham, A. (1979), *The Ancient Geography of India I: Buddhist Period*. rep., New Delhi.
- Curiel, R. (1953), Site de Caboul. In: R. Curiel & D. Schlumberger, *Trésors monétaires d'Afghanistan*. MDAFA 14, Paris, 128–130.
- Dale, S. F. & A. Payind (1999), The Ahrārī *waqf* in Kābul in the year 1546 and the Mughūl Naqshbandiyya. *Journal of the American Oriental Society* 119 (2), 218–233.
- Darmesteter, J. (1894), Lettre de Tansar au roi de Tabaristan. *Journal Asiatique*, Mars–Avril 1894, 185–250.
- Daryaei, T. (2002), *Šahrestānīhā ī Ērānšahr*. Costa Meza.
- Diller, Ö. (2009), *Islamic Mints*. 3 vols., Istanbul.
- Elphinstone, M. (1815), *An Account of the Kingdom of Caubul*. London.
- Enomoto, F. (1994), A Note on Kashmir as Referred to in Chinese Literature: Ji-bin. In: Y. Ikari (ed.), *A Study of the Nilamata —Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir*, Institute for Research in Humanities, Kyoto University, 357–365.
- Errington, E. (2010), Differences in the Patterns of Kidarite and Alkhon Coin Distribution at Begram and Kashmir Smast. In: M. Alram et al. (eds.), *Coins, Art and Chronology II: The First Millennium C. E. in the Indo-Iranian Borderlands*, Vienna, 147–168.
- Fleet, J. F. (1888), *Inscriptions of the Early Gupta Kings and Their Successors*. Corpus Inscriptionum Indicarum 3, Calcutta.
- Foucher, A. (1942), *La vieille Route de l'Inde de Bactres a Taxila*. I, MDAFA 1, Paris.
- Frye, R. N. (1966), The Persepolis Middle Persian Inscriptions from the Time of Shapur II. *Acta Orientalia* 30, 83–93.
- Frye, R. N. (1969), Bare Semitic Masks in the Middle Persian Inscriptions. *Studia classica et orientalia Antonino Pagliaro oblata*, Vol. 2, Roma, 141–146.
- Fussman, G. (2008), *Monuments bouddhiques de la région de Caboul/ Kabul Buddhist Monuments*, II. Publication de l'Institut de Civilisation Indienne du Collège de France, Paris.
- Ghafur, M. A. (1965–66), Two Lost Inscriptions Relating to the Arab Conquest of Kabul and the North West Region of West Pakistan. *Ancient Pakistan* 2, 4–12.
- Ghirshman, R. (1946), *Bégram: Recherches archéologiques et historiques sur les Kouchans*. MDAFA 12, Le Caire.
- Gignoux, Ph. (1972), *Glossaire des Inscriptions Pehlevies et Parthes*. Corpus Inscriptionum Iranicarum, Supplementary Series I, London.
- Göbl, R. (1967), *Dokumente zur Geschichte der iranischen Hunnen in Baktrien und Indien*. 4 Vols., Wiesbaden.
- Grenet, F. (1996), Crise et sortie de crise en Bactriane–Sogdiane aux IV^e–V^e siècles: de l'héritage antique à l'adoption de modèles sassanides. In: G. Gnoli et al. (eds.), *La Persia e l'Asia centrale da Alessandro al X secolo*, Rome, 367–390.
- Grenet, F. (2002), Regional Interaction in Central Asia and Northwest India in the Kidarite and Hepthalite Periods. In: N. Sims–Williams (ed.), *Indo-Iranian Languages and Peoples*, Oxford, 203–224.

- Grenet, F. (2006), Nouvelles données sur la localisation des cinq Yabghus des Yuezhi. *Journal Asiatique* 294 (1), 325-341.
- Gyselen, R. (1989), *La géographie administrative de l'Empire Sassanide*. Paris.
- 飯尾都人 (譯) (1994), ストラボン著『ギリシア・ローマ世界地誌』I & II, 龍溪書舎.
- 稲葉穰 (1991), 「7-8 世紀ザブリスターンの三人の王」. 『西南アジア研究』 35, 39-60.
- 稲葉穰 (1994), 「ガズナ朝の「王都」ガズナについて」. 『東方學報』 京都 66, 200-252.
- 稲葉穰 (2002), 「初期イスラーム時代におけるインドへの道 —— アフガン高地からインダス流域へ ——」. 桑山正進編『石窟寺院の成立と變容』(科學研究費補助金基盤研究 (B) (2) 研究成果報告書), 1-25.
- 稲葉穰 (2004), 「アフガニスタンにおけるハラジュの王國」. 『東方學報』 京都 76, 318-382.
- 稲葉穰 (2010), 「8 世紀前半のカーブルと中央アジア」. 『東洋史研究』 69 (1), 151-174.
- 稲葉穰 (2011), 「悟空(車奉朝)の入竺經路について」. 船山徹編『中國印度宗教史とくに佛教史における書物の流通傳播と人物移動の地域特性』(科學研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書), 65-82.
- 稲葉穰 (2013), 「8-10 世紀ヒンドゥークシュ山脈の南北」. 『西南アジア研究』 79, pp. 1-27.
- Jarrett, H. S. (tr.) (1978), *The Ā'in-i Akbarī*. 3 vols., 3rd. ed., Calcutta.
- 加藤和秀 (1971), 「ティームールのインド遠征について」. 尚樹啓太郎編『歴史における文明の諸相』, 東海大學出版會, 171-240.
- 川本正知 (2005), 「「ホージャ・アフラルの資産」再考」(2005 年 2 月 5 日「イスラーム寫本・文書資料の総合的研究」平成 16 年度第三回研究會における口頭発表).
- Klimburg-Salter, D. (2010), Cultural Mobility, a Case Study: The Crowned Buddha of the Kabul Shāh. In: M. Alram et al. (eds.), *Coins, Art and Chronology II: The First Millennium C. E. in the Indo-Iranian Borderlands*, Vienna, 39-56.
- 桑山正進 (1985), 「バーミヤーン大佛成立にかかわるふたつの道」. 『東方學報』 京都 57, 109-209.
- 桑山正進 (1989), 「7 世紀におけるベグラームの存立」. 『西南アジア研究』 30, 21-55.
- 桑山正進 (1990), 『カーピシー=ガンダーラ史研究』. 京都大學人文科學研究所.
- 桑山正進 (1991), 「ガネーシャ神像碑銘にみえるカーブル突厥王の編年」. 『西南アジア研究』 35, 22-38.
- 桑山正進 (編著) (1992), 『慧超往五天竺國傳研究』. 京都大學人文科學研究所.
- 桑山正進 (1993), 「6-8 世紀 Kāpīśī-Kābul-Ghazni 地方の貨幣と支配者」. 『東方學報』 京都 65, 381-430.
- Kuwayama, S. (2000), Historical Notes on Kāpīśī and Kābul in the Sixth-Eighth Centuries. *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities*, Kyoto University 34, Part 1, 25-77.
- 桑山正進 (2001), 「馨孽, 順達, 刹利, 曷擲支」. 『佛教文化の基調と展開』石上善應教授古稀記念論文集, 山喜房書林, 131-145.
- Kuwayama, S. (2010), Between Begram II and III: A Blank Period in the History of Kāpīśī. In: M. Alram et al. (eds.), *Coins, Art and Chronology II: The First Millennium C.E. in the Indo-Iranian Borderlands*, Vienna, 283-297.
- La Vaissière, É. de (2007 [2012]), A Note on the Schøyen Copper Scroll: Bactrian or Indian? *Bulletin of the Asia Institute*, 21, 127-130.
- Levi, S. C. (2002), *The Indian Diaspora in Central Asia and its Trade*. Leiden.
- Littre, É., (ed. & tr.) (1860), *Histoire Naturelle de Pline*. 2 Vols., Paris.

- Lurje, P. (2003), "Shapur's Will" in Bukhara. In: M. Compareti, P. Raffetta & G. Scarcia (eds), *Ēran ud Anērān: Webfestschrift Marshak 2003*, (<http://www.transoxiana.org/Eran/Articles/lurje.html>).
- 間野英二 (譯注) (1998), 『パープル・ナーマ』. 松香堂.
- Marquart, J. (1901), *Ērānšahr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenac'i*. Berlin.
- Masson, Ch. (1842), *Narrative of Various Journeys in Balochistan, Afghanistan and the Panjab*. 3 Vols., London.
- Mayhoff, C. (ed.), (1906), *C. Plini Secvndi: Naturalis historia*, Vol. 1. Teubner.
- McCrindle, J. W. (2000), *Ancient India as Described by Ptolemy*. rep., New Delhi.
- Melzer, G. (2006), A Copper Scroll Inscription from the Time of the Alchon Huns, In: J. Braavig (ed.), *Manuscripts in the Schøyen Collection: Buddhist Manuscripts III*. Oslo, 251-314.
- Minorsky, V. (tr. & com.) (1982), *Hudūd al-'Ālam (The Region of the World)*. 2nd ed. by C. E. Bosworth, Cambridge.
- 宮本亮一 (2012), 「バクトリア語文書中に見えるカダグスタンについて」. 『東方學報』京都 87, 413-448.
- 水谷眞成 (譯) (1971), 『大唐西域記』. 平凡社.
- 中野定雄・他 (譯) (1986), プリニウス著『プリニウスの博物誌』I. 雄山閣.
- 中務哲郎 (譯) (1986), プトレマイオス著『プトレマイオス地理學』. 東海大學出版會.
- Narain, A. K. (1957), *The Indo-Greeks*. Oxford.
- NRICP: *Documentation of Cultural Monuments in the Kabul Region, Afghanistan*: 2006. National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo.
- Nyberg, H. S. (1964), *A Manual of Pahlavi, Part I Texts*. Wiesbaden.
- Nyberg, H. S. (1974), *A Manual of Pahlavi, Part II Glossary*. Wiesbaden.
- Paiman, Z. & M. Alram (2013), *Tepe Narenj à Caboul, ou l'art bouddhique à Caboul au temps des incursions musulmanes I: Chronologie, bâtiments, céramiques et monnaies*, Paris.
- Pulleyblank, E. G. (1962), The Consonantal System of Old Chinese. *Asia Major* 9, 58-144, 206-65.
- Rahman, A. (1979), *The Last Two Dynasties of the Śāhis*. Islamabad.
- Rahman, A. (2005), New Light on the Khingal, Turk and the Hindu Sahis. In: O. Bopearachchi & M.-F. Boussac (eds.), *Afghanistan, ancien carrefour entre l'est et l'ouest*. Turnhout, 413-420.
- Ronca, I. (ed. & tr.) (1971), *Geographie* 6, 9-21: *Ostiran und Zentralasien*, Teil I. IsMEO, Rome.
- Schwarz, F. (1995), *Sylloge Numorum Arabicorum Tübingen: Ġazna/Kabul (XIV Ĥurāsān)*. Berlin.
- Simonetta, A. M. (1978), The Chronology of the Gondopharean Dynasty. *East and West* 28, 155-187.
- 白鳥庫吉 (1911-12), 「西域史上の新研究」. 『東洋學報』1 (3); 2 (1); 3 (1/2) (『白鳥庫吉全集』6, 岩波書店, 1970, 57-227 に再録。本文中頁番號はこれによる)
- 白鳥庫吉 (1917), 「罽賓國考」. 『東洋學報』7 (1) (『白鳥庫吉全集』6, 岩波書店, 1970, 295-359 に再録)
- 薮勇造 (1997), 「新譯『エリュトラ海案内記』」. 『東洋文化研究所紀要』132, 1-30.
- Tarn, W. W. (1951), *The Greeks in Bactria & India*. Cambridge.
- Thierry, F. (2005), Yuezhi et Kouchans. Pièges et dangers des sources chinoises. In: O. Bopearachchi & M.-F. Boussac (eds.), *Afghanistan: Ancien carrefour entre l'est et l'ouest*. Turnhout, 421-539.

- Verardi, G. (2011), *Hardships and Downfall of Buddhism in India*. New Delhi.
- Verardi, G. (2012), The Brahmanisation of Gandhāra and Greater Gandhāra. In : T. Lorenzetti & F. Scialpi (eds.), *Glimpses of Indian History and Art : Reflections on the Past, Perspectives for the Future*. Roma, 153-172.
- Vigne, G. T. (1839), Outline of a Route Through the Panj-āb, Kābul, Kashmīr, and into Little Tibet, in the Years 1834-8. *Journal of the Royal Geographical Society of London* 9, 512-516.
- Vigne, G. T. (1840), *A Personal Narrative of a Visit to Ghuzni, Kabul & Afghanistan*. London.
- Vondrovec, K. (2010), Coinage of the Nezak. In : M. Alram *et al.* (eds.), *Coins, Art and Chronology II : The First Millennium C.E. in the Indo-Iranian Borderlands*, Vienna, 169-190.
- Wilson, H. H. (1841), *Ariana Antiqua : A Descriptive Account of the Antiquities and Coins of Afghanistan*. London.
- 家島彦一 (譯) (1999), イブン・バットゥータ著『大旅行記 4』. 平凡社東洋文庫.
- 吉田豊 (2013), 「バクトリア語研究ノート」. 『内陸アジア言語の研究』 28, 39-65.
- 余太山 (1990), 「大夏和大月氏綜考」. 『中亞學刊』 3, 17-46.
- 余太山 (2002), 「漢晉正史“西域傳”所見西域諸國的地望」. 『歐亞學刊』 2, 37-72.

Kābul in the Premodern Period :
Historical Shifts of the Regional Center in Eastern Afghanistan

Minoru INABA

There is much obscurity in the history, especially the pre-modern history, of Kabul, the present capital of the Islamic Republic of Afghanistan. In this paper, an attempt has been made to elucidate as much as possible the history of the city from ancient times up to the 18th century, by integrating the results of the researches on the literary sources, the analyses of archaeological materials, and numismatic studies. As a result, though still provisional, the following conclusions have been attained : 1) In eastern Afghanistan, the regional center shifted according to the politico-military setting among three historical cities, that is, Kābul, Kāpīśī, which was located at the archaeological site of Begram about 50 km by map to the north of Kābul, and Ghazni, which is located 140 km to the southwest of Kābul and flourished from the end of the 10th century as the royal capital of the Ghaznavid empire. 2) Those shifts of the politico-economic center of the region had been related to the geographical circumstances characterized by presumably limited agricultural production and enormously vigorous mercantile activities.